

316.88

0964t



0007111000

2

0007111-000

316.88-0964t

東亜とユダヤ問題

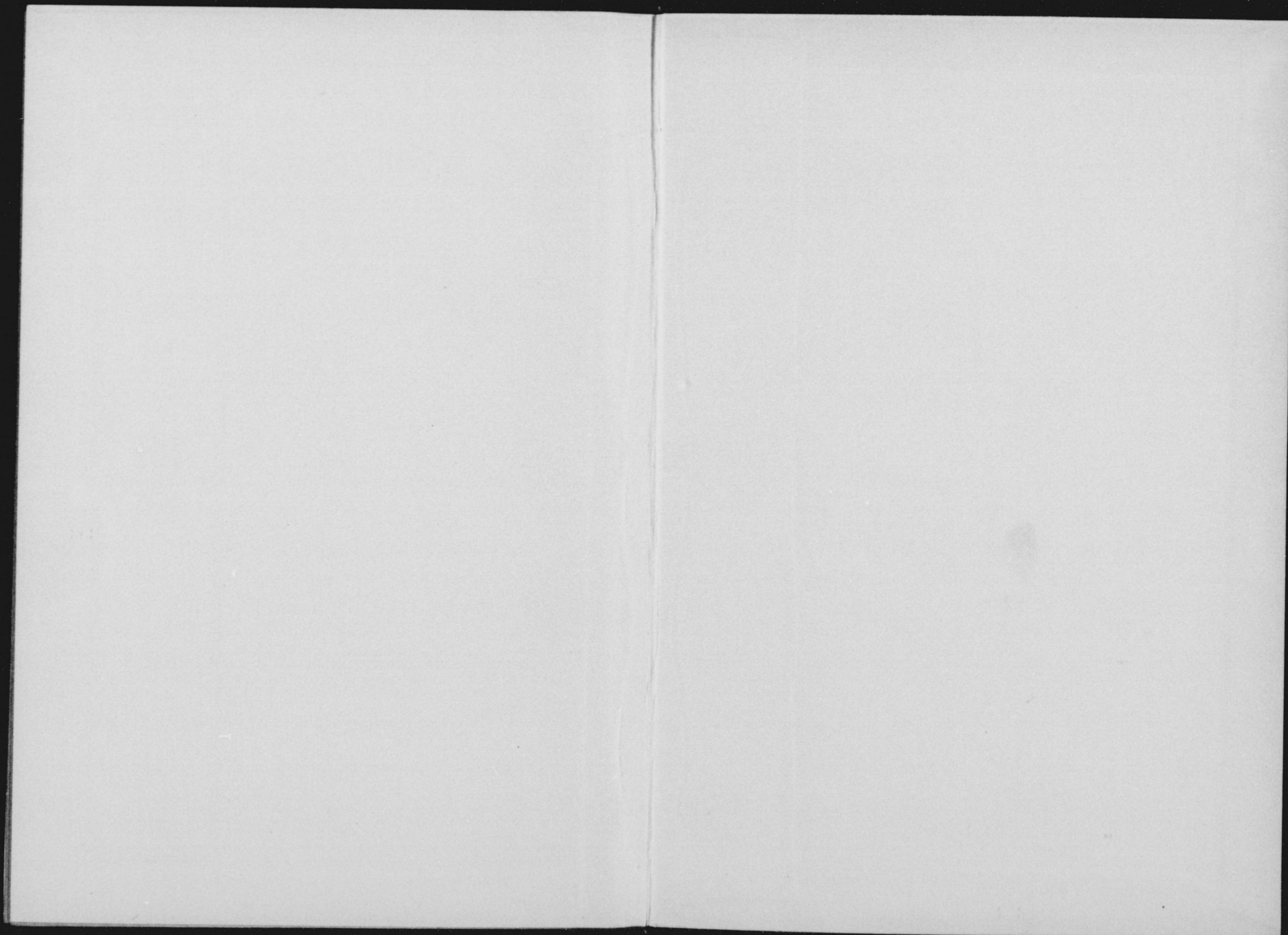
小山猛夫・著

中央公論社

1941

ABG

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

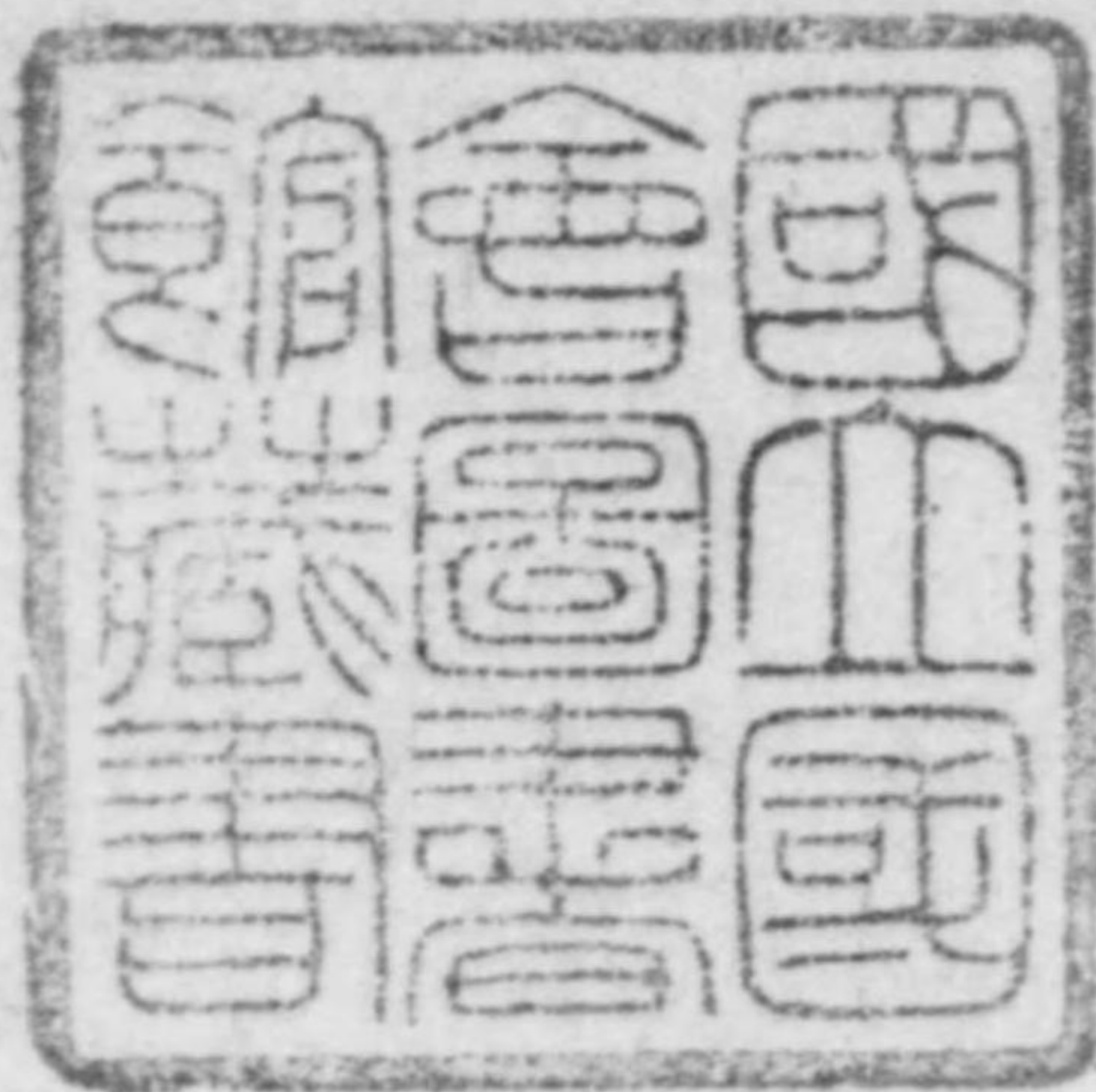


キエ-2V-56

東亞とユダヤ問題

小山猛夫

東亞新書



16.88
964t

33001

緒言

ユダヤ問題は長きに於て二千年以上に遡り、廣きに於て全世界に跨り、深きに於て人間生活の一切の部に滲透してゐると言はれる。従つて本問題が複雑を極め難解視されることは當然であつて、之を詳論する如きは、到底片々たる本書の企て得るところではない。

繙つて近代に於ける日本の國際的進出は、好むと好まざるに拘らず、既に本問題と直接或は間接に關係を持たざるを得なくなつてゐるが、我國朝野の之に對する態度を観るに、問題の真相に徹せざるための認識不足による無關心と輕視か、さもなくば正しき研究方法の缺如から來る問題の徒らなる怪奇化に終始する憾なきにあらずで、眞の正しき研究は尙將來に俟たねばならぬ状態にある。

本書は斯かる複雑難解なる問題を努めて問題の本筋に添うて簡單化し、平明化せんとした一つの試みである。内容に於て周到を期し難いが、一般人の本問題に對する率直なる理解に幾分にも資し得れば、則ち目的は達せられるのである。

尙本書に於ては遠い過去の事は現在を説明する上に必要な程度に於て觸れることと

したため、古往に疎にして近代に比較的精しい結果となり、均勢のとれぬものとなつた。之は本小篇の眼目を飽くまで現代のユダヤ問題究明に置いたために外ならぬ。

著者

緒言

前篇 ユダヤ問題の輪廓……………一

第一章 ユダヤ民族概説……………二

 第一節 ユダヤ民族の史的瞥見……………二

 第二節 ユダヤ民族内の二型……………四

 第三節 ユダヤ民族の移動及び分布状況……………六

 第四節 問題の對象としてのユダヤ民族の定義……………二

第二章 ユダヤ問題の本質……………三

第三章 古代及び中世に於けるユダヤ問題の特色……………七

 第一節 不同化性とユダヤ教……………七

 第二節 宗教的反感……………九

 第三節 社會、經濟的反感……………一〇

 第四節 心理的反感……………二

第四章 近世及び現代に於けるユダヤ問題の特色……………三三

 第一節 ユダヤ民族の解放と進出……………三三

 一 經濟的進出……………三四

 二 新聞、通信及び映畫事業への進出……………三五

 三 政治的進出……………三六

 四 社會急進思想及び運動に於けるユダヤ人……………三七

 五 藝術及び學術界への進出……………三八

 第二節 反……………三九

 一 同化思想の瀰漫と民族精神の崩壊……………四〇

 二 反猶思想及び運動の再擡頭……………四一

 第三節 近世及び現代に於けるユダヤ問題の特色……………四二

 一 經濟的政治的對立……………四三

 二 現代反猶とヒットラーの民族理論……………四四

 三 所謂「プロトコール」の影響……………四五

第五章 ユダヤ問題對策の史的考察とその將來……………四六

 第一節 今次大戰とユダヤ民族……………四七

後篇 日本とユダヤ問題……………五〇

 第一章 東亞に於けるユダヤ人概況……………五〇

 第一節 日本に於けるユダヤ人……………五一

 第二節 滿洲國及び關東州に於けるユダヤ人……………五二

 第三節 支那に於けるユダヤ人……………五三

 一 北支諸都市に於けるユダヤ人概況……………五四

 二 上海に於けるユダヤ人概況……………五五

 第四節 佛印及び蘭印に於けるユダヤ人……………五六

 一 佛印概況……………五七

 二 蘭印概況……………五八

 第二章 日本に於けるユダヤ問題……………五九

 第一節 初期に於ける我國のユダヤ問題……………六〇

第二節 現代に於ける現實的諸問題	100
一 在滿ユダヤ人問題	101
二 在支外國籍ユダヤ人問題	101
三 新來ユダヤ避難民問題	102
第三章 ユダヤ問題對策の日本的基調	102
第一節 ユダヤ問題對策の根本基調	102
一 根本基調としての皇道精神	102
二 皇道を基調とする諸對策要領	102
第二節 ユダヤ問題の將來と皇道日本の使命	103
第三節 所謂「ユダヤ利用問題」に就て	103

前篇 ユダヤ問題の輪廓

第一章 ユダヤ民族概説

第一節 ユダヤ民族の史的瞥見

ユダヤ民族は小亞細亞山地とアルメニヤ地方から出たアルメノイド人種とアラビア半島に發したオリエンタル人種の混血したセム種族の一分派で、約四千年以前メソポタミヤの地方に、エホバの神を信仰しつゝ遊牧してゐた民族である、と一般に信ぜられてゐる。西歴紀元前二〇〇〇年頃その族長アブラハムに率ゐられて、ユーフラット河を渡り、カナンの地たる今日のパレスティンに定住した。その後更に南方に移動し、紀元前一五五〇年から一三二〇年まで約二百年間埃及に居住したが、迫害を逃れ、一三二〇年族長モーゼに率ゐられて同地を脱出し、カナンに復歸した。

モーゼがエホバの神をユダヤ民族の唯一神として確立し、民族の精神的統一に資したのみでなく、全人類の唯一神としての信仰までも基礎付けて、後世彼等の所謂「選民思想」への淵源をなしたことは、餘りにも著名である。

ユダヤ民族はその後十二支族に分れて相争ひ、民族の統制が保たれぬところから、時の高僧サムエルはソールを樹て、國王と爲し、茲に初めてユダヤ王國なるものが建設された。その後ユダヤ王國ではダビデ、ソロモン等の英邁なる君主が出て、王國の勢威は四隣を壓したが、紀元前九五三年ソロモンの没するに及び國內は南北兩朝に分れ、北をイスラエル王國、南をユダヤ王國と稱へるに至つた。國家の分裂と共に國威は地を拂ひ、兩王朝とも間もなく隣邦アッシリア人のために攻め取られ、全く滅亡した。その後埃及、バビロニア、シリア等附近に強國の勃興を見るや、常に此等近隣諸國の屬領となり、紀元前六三年、羅馬のポンペイ將軍に征服されて、羅馬帝國の治下に入つたのである。

然るに、ユダヤ人は羅馬に對して、屢々反亂を企てた。西歴紀元一三五年、時の皇帝ハドリアヌスは叛亂常なきユダヤ民族を徹底的に彈壓し、パレスティンより彼等を追放する目的を以て、苛酷なる重税を課し、エルサレム市内にはその居住を嚴禁した。茲に於て彼等は國民としての集團力を失ひ、埃及、バビロニア、シリア、波斯と、故國を棄て、四散し、その先々で部落を作つて、所謂「ジャスポラ」と稱する分散生活を始めたのである。

分散生活に入つてからのユダヤ民族の歴史には、大體三つの時期が劃されてゐる。即ち第一の時期（略紀元六〇〇年迄）に於ては、民族の重心が未だパレスチナ或はバビロンにあつた。第二の時期（略六〇〇年頃より一七五〇年迄）には、それが次第に東洋から歐洲へと移動した。この間に於てユダヤ民族は中世に歐洲文化に進入し（五〇〇年より一〇〇〇年迄）、その精神生活の全盛時代に達し（一〇〇〇年よ

リ一二〇〇年迄)、又永き苦難時代を経過した(一二〇〇年より一七五〇年迄)。第三の時期(一七五〇年以後)に於ては、市民たるの権利を獲得し、歐洲及びアメリカに於て、國家的にも、また文化、經濟の方面に於ても影響するところ強大となり、その結果一九〇〇年以後再び排斥と迫害を受けるに至つたのである。

故國を失つたユダヤ民族が、全世界に分散し他民族の間に介在しつゝ、而も尙民族としての意識と團結とを失はず、凡ゆる壓制、迫害に堪へつゝ二千年後の今日までよくその存在を保ち得た根本の理由は、ユダヤ教によつて彼等の間に培はれた鞏固なる「選民意識」、それに基づく獨目の生活法なり世界觀の中に求むべきものとされるのである。

第二節 ユダヤ民族内の二型

分散生活の中に、ユダヤ民族は大體に於て、二派に分れた。その一つはトルコ、バルカン諸國、北伊、ドイツ、ハンガリー、オーストリー、ポーランド、ガリシア、ロシア等に擴まつた東北のグループである。他の一つは、西南方面のもので、大アラビア文化圏、北アフリカ、及びボスフォラスからスペインに亘る南歐に擴まつたものである。

歴史的運命と環境、精神的身體的教育の全き相違、雜婚等により、民族的にも、文化的にも異つた

世界へ同化したこと、或は又北方と南方の異なる風土に影響されたこと等により、二つのユダヤ人の型が發達した譯で、ドイツ型又は「アシケナジム」とスペイン型又は「セファルジム」の二型がそれである。前者はアルペンの色彩強くゲルマン、スラブ化されたユダヤ人であり、後者はアラブ及び南歐人の血を受け地中海化されたユダヤ人で、いづれかと言へはセファルジムの方が古くもあり、比較的純であると一般に認められてゐる。いま年代別に全世界のユダヤ人數と兩型發達の比例を示せば次表の如くである。

年 代	全ユダヤ人數	アシケナジムの數	全ユダヤ人に對するアシケナジムの數
紀元 七〇	四五〇,〇〇〇	—	〇・〇〇%
一七〇	一,五〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	六・七%
一三〇〇	二,〇〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	一五・〇%
一五〇〇	一,五〇〇,〇〇〇	五〇〇,〇〇〇	三三・三%
一六五〇	一,七五〇,〇〇〇	七〇〇,〇〇〇	四〇・〇%
一七〇〇	二,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	五〇・〇%
一八〇〇	二,五〇〇,〇〇〇	一,五〇〇,〇〇〇	六〇・〇%
一八四〇	四,〇〇〇,〇〇〇	三,六〇〇,〇〇〇	八〇・〇%
一八六〇	六,〇〇〇,〇〇〇	五,二〇〇,〇〇〇	八六・六%
一九〇〇	一〇,〇〇〇,〇〇〇	九,五〇〇,〇〇〇	九〇・五%
一九三〇	一五,〇〇〇,〇〇〇	一四,六〇〇,〇〇〇	九一・八%

(滿鐵資料「ユダヤ人種、分布、職業の問題」に據る)

即ち初期時代に於てセファルジム型ユダヤ人が斷然多數を制したのであるが、漸次比重が減少して十八世紀初頭に於て略アシケナジム型ユダヤ人と同數となり、爾後アシケナジム型が躍進的に増加して、一九三〇年に於てセファルジム型ユダヤ人は僅かに全ユダヤ人數の八%餘を占め、主としてメソポタミヤ、アジア・トルコ、コーカサス、シリア、パレスチナ、アラビア、ベルシヤ、アフガニスタン等の前部アジア地方並に北アフリカ諸國、ギリシヤ等に居住してゐる。之に反してアシケナジム型ユダヤ人は他の約九二%を占めて、世界到る處の諸國に居住するユダヤ人の殆んど全部を構成してゐるのである。

最近二世紀に於ける著しいセファルジム型人口の停滞の原因としては、彼等の主たる居住地方に於ける非衛生的條件と頻々たる流行病とによる死亡率の大なること、歐洲に於てセファルジムとアシケナジムの婚姻によつて生れる子供が通常アシケナジムとして數へられること等が挙げられる。因みに精神的素質に關して兩型ユダヤ人の間に優劣をつけることは至難であるが、唯概してセファルジムは自らを特に優れたるものと信じ、アシケナジムと同列に置かれることを好まず、一般にもセファルジムを一段高いものに見る傾向のあることは見逃し得ぬ事實である。

第三節 ユダヤ民族の移動及び分布狀況

ユダヤ人が歐洲諸國へ流入を開始したのは、遠くキリスト紀元前の事に屬するが、大量の移入を見るに至つたのは、七世紀に於けるアラビア人のスペイン占領後のことである。而も尙、九、十世紀にはユダヤ民族の中心は未だ東洋特にバビロニアにあつた。ユダヤ人がスペインから放逐された一四九二年頃から十七世紀末までは東西略その數を等しくしたが、十八世紀以來俄かに西洋の比重が高まり、唯にヨーロッパのみならずヨーロッパ諸國の各植民地にも擴まつた。

更に十九世紀特にその後半に入つて認められる著しい變化は、アメリカに於けるユダヤ人口比率の急増であつて、これはユダヤ人が東歐方面の迫害を新開地に求め移動したことを意味する。併し全體より謂へばユダヤ民族の過半は尙東歐に在ると言へるのである。

一九三九—四〇年版アメリカ・ユダヤ年鑑によれば、最近の全世界ユダヤ人口は約一千六百二十萬に達し、その中米國は四百八十三萬で首位を占め、次で波蘭の約三百十一萬、ソ聯邦の二百六十八萬といふ順序である。以下掲ぐる諸表は、近代及び現代に於けるユダヤ民族の移動及び分布狀況を示すものである。^(註)

第一表 過去一世紀間に於けるユダヤ民族の地域別分布狀況

年 代	一八二五年	一八五〇年	一八八〇年	一九〇〇年	一九二五年
ユダヤ人總數	三、三六一、〇〇〇	四、七六四、五〇〇	七、六六三、五〇〇	一〇、六〇一、五〇〇	一四、八〇〇、〇〇〇

内 譯	ヨ—ロッパ		内 譯		東 歐		西 歐、中 歐		ア 美 利 カ		ア ー ン ン ン		オ ー ス トラ リ ア		
	絶対數	%	絶対數	%	絶対數	%	絶対數	%	絶対數	%	絶対數	%	絶対數	%	
ヨ—ロッパ	二、七三〇、〇〇〇	八三・二	四、二二七、五〇〇	八六・六	六、七七一、五〇〇	八八・四	八、六九〇、五〇〇	八三・一	九、二九〇、五〇〇	一、六七七、〇〇〇	一一・五	一、六七七、〇〇〇	一一・五	二、二九〇、〇〇〇	二二・七
内 譯	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
東 歐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
西 歐、中 歐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ア 美 利 カ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ア ー ン ン ン	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
オ ー ス トラ リ ア	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

第二表 最近五十年(自一九八一年(一九三〇年)間に於けるユダヤ民族移動狀況

出 國		入 國	
國 名	出 國 數	國 名	入 國 數
(一) ロ シ ア	二、二八五、〇〇〇	(一) 合 衆 國	二、八八五、〇〇〇
(二) ポ ー ラ ン ド	九五二、〇〇〇	(二) カ ナ ダ	一三五、〇〇〇
(三) ル ー マ ニ ア	三三三、〇〇〇	(三) ア ルゼンチン	一七〇、〇〇〇
		(四) ブ ラ ジ ル	一〇〇、〇〇〇
		(五) 中 央 ア メ リ カ	三〇、〇〇〇

計	三、九七五、〇〇〇	計	三、九七五、〇〇〇
四イギリス	二四、〇〇〇	内西歐諸國	四九〇、〇〇〇
其他諸國	三九、〇〇〇	内アフリカ	九五、〇〇〇
		内パレスチナ	三〇、〇〇〇
		内オーストラリア	二〇、〇〇〇

第三表 最近に於けるユダヤ民族の地域別分布状況

地域別	總人口	ユダヤ人口	總人口に對する%	ユダヤ總人口に對する%
ヨーロッパ	五、四九七、九四九	九、三九四、〇七三	二・一〇	五八・〇五
中歐	一、三二一、六六九、〇三八	七、四二八、一三五	五・六四	
西南歐	二、九五一、〇四三、三三三	一、七七一、一六八	〇・六〇	
北歐	八八、二七六、六六九	一、八四、七七九	〇・二一	
アメリカ	二、四九九、八〇九、六三三	五、三三三、二〇〇	二・一四	三三・〇二
アジア	一、〇三三、七五五、九一九	八二五、二四三	〇・〇八	五・〇四
アフリカ	七、七六三、〇一七	六〇一、七九七	〇・七八	三・七二
オーストラリア	二一、五八八、〇三八	二七、〇一六	〇・一二	〇・一七
計	一、八八六、七四三、五四六	一六、一八一、三三八	〇・八六	一〇〇・〇〇

廓輪の題問ヤダユ

第四表 最近に初けるユダヤ民族の關係主要國別分布状況

關係主要國別	總人口	調査年度	ユダヤ人口	調査年度	%	備考
アメリカ合衆國	一三九、三五七、〇〇〇	一九三七年	四、八三一、一八〇	一九三七年	三・七四	
ポーランド	三四、七七五、六九八	一九三九年	三、二二五、九〇〇	一九三一年	八・九三	
ソ連邦	一五八、一五九、〇五〇	二六年、三三年、 兩度ヲ含ム	二、六七六、一〇九	一九二六年	一・六九	過半数の約一五八萬人 ハウクライナ共和国内 ニ居ル
ドイツ	七六、四四四、〇一六	一九三九年	六九一、一六三	一九三九年	〇・九〇	總人口ハオーストリー 及ズデーテンヲ含ム ユダヤ人口ハオースト リーヲ含ミズデーテン ヲ含マズ
ルーマニア	一九、五五五、三九八	一九三七年	九〇〇、〇〇〇	一九三四年	四・六〇	
フランス	四一、九〇五、九六八	一九三六年	二、四〇〇、〇〇〇	一九三六年	〇・五七	
イタリア	四三、五二七、五六一	一九三六年	五七、四二五	一九三八年	〇・一三	
ハンガリア	一一、一三七、九九三	一九三九年	四四、五六七	一九三〇年	三・九九	
チェコスロワ キア	九、八〇七、〇九六	一九三八年	三五六、八三〇	一九三〇年	三・六三	ユダヤ人口ハ舊子エツ コスロワキア領域ノモ ヲ示ス
カナダ	一〇、三七六、七八六	一九三一年	一五五、六一四	一九三一年	一・五〇	
パレスティン	一、四一八、六一八	一九三八年	三九九、八〇七	一九三八年	二八・一八	
日本	九七、六九七、五五五	一九三五年	二〇〇	一九三八年		哈爾濱八、〇〇〇、上 海五、〇〇〇、天津三、 〇〇〇、奉天一、〇〇〇、 五〇〇、秦天一、〇〇〇、 〇ヲ含ム
支那	四五七、八三五、四七五	一九三六年	一九、八五〇	一九三五年		大ブリティン及北部アイ ランドヲ含ム
イギリス本土	四六、一七八、八八四	一九三一年	三〇〇、〇〇〇	一九三一年	〇・六五	

註、第一表は滿鐵資料「ユダヤ人種、分布、職業ノ問題」、第二表は露版「ユダヤ年鑑」(一九三九年版)、第三

及び第四表はアメリカ版「ユダヤ年鑑」(一九三九、四〇年版)にそれらに據る。

第四の主要國別分布表に關しては、筆者に於て便宜上若干の補整を加へたこと、調査年度の相違から嚴密な意味での計算が不能であり、特に最近のドイツ及び中歐諸國の排猶政策に基く人口移動の含まれて居らぬこと、同一國に於て總人口とユダヤ人口の調査年度を異にするものは比較の方法無く、單に大體の見當に資するため假りの比率を求め括弧内に之を示したこと(この點は第三表も同じ)等を承知されたい。尙此等諸表に言ふユダヤ人口とは、ユダヤ教を信奉するもののみを意味するものである。

第四節 問題の對象としてのユダヤ民族の定義

以上、ユダヤ民族を歴史的にその生成過程及び移動分布状態等に就て瞥見したが、元より本論としてのユダヤ問題の検討に入るに先立ち、一應問題の對象としてのユダヤ人又はユダヤ民族なるものの定義を明かにしなければならぬ。

先づ結論を先に言へば、ユダヤ人なる概念は、大體に於てユダヤ教を信奉する廣義の人種單位としてのユダヤ人と見做すことが妥當と考へられる。以下にその理由を述べよう。

ユダヤ人は既に之まで述べたところからも想像される如く、古代に於ては勿論分散後と雖ども、常に他種族の間に介在し、種々雑多の混淆混血を経て來たものであり、その結果極めて多様な型を所有することになつた。従つて一個のユダヤ人型なるものは無く、ユダヤ人は他の凡ゆる「文明人種」と

際立つて違つてゐるものではないのである。換言すれば、人種とは、嚴密な意味に於て生物學的な意味での身體的要素を遺傳共有し、之により他と區別される人間集團であるとすれば、ユダヤ人は一個の人種單位と見做すことは出来ない。

だが、人種といふ概念を廣義に解釋し、人種とは、その起源を共にし、一定の身體的精神的表徴を共有し、血縁を以て結ばれる人間集團であるとする。即ち一面に於ては生物學的概念であると共に、他方に於て歴史的內容を持つ文化的社會的所産なりとすれば、ユダヤ人も亦一箇の人種といふ概念の下に考へられること、恰もドイツ人やフランス人やイギリス人等を夫れ々々ゲルマン人種、ゴール人種、ブリテン人種と稱すると同然である。

而してこの場合のユダヤ人種とは、身體的要素よりもより多く精神的文化的要素により區別される民族にも同時に該當するものであり、本文に言ふユダヤ民族とは即ち斯かる意味に於てのユダヤ人種と解さるべきであらう。

ところで、ユダヤ民族或はユダヤ人種の内容を具體的に決定するものは何かと言へば、當然肉體の血縁關係と精神的文化的內容といふことになるが、前者はバレスチナ・ユダヤ人の子孫と見るべきアシケナジムとセファルジムとを以て、その限界とすることを妥當と認めなければならぬ。何となれば、ユダヤ人はバレスチナを逐はれ、分散生活に入つてから、右の兩型を生ずるに至つたのであるが、同時にこの兩型は環境の影響下にユダヤ教の律法に鼓舞せられ、且つ必要に餘儀なくせられて、殆ん

ど純血内産に終始することにより、或る意味に於て人類學上の一個の單位の代表的二型を構成するに至つたと見られ得るからである。

次にユダヤ民族の内容を決定する他の一面——精神的文化的要素に就て述べれば、その代表的なものはユダヤ教であつて、元はユダヤ民族なる概念構成上から言へば、前者の生物學的な血縁關係以上に重要なものと言はなければならぬ。既に一部の人々の間に於て、ユダヤ民族とはユダヤ教を信仰する人間の宗教的集團なりとし、或は今日のユダヤ人はもはや完全なるユダヤ人でなく、單にモーゼの宗教を信仰するドイツ人、フランス人、イギリス人等々であると稱される所以も之に據るのである。

事實、ユダヤ民族の文明傾向は、最初から宗教的であつたことは明かである。而して國家としての統一が破れてからは、その國教であつたユダヤ教が、分散後の同胞を繋ぐ最も強い紐帶となつたのである。即ちユダヤ人の社會はこの意味に於て正しく宗教團體でもあるのである。

斯く觀じ來れば、血縁關係とユダヤ教信奉こそは、ユダヤ民族構成の二大要素であつて、假令ユダヤ人の血を引いても、ユダヤ教を離れ、ユダヤ人社會より逸脱し去つたものは（斯様なものは綿密に調査すれば無數に存在する筈である）、明かにユダヤ人家庭に育ち、ユダヤ人社會と交渉を斷ち得ないで居る單なる改宗者は別として、ユダヤ人問題の對象としてのユダヤ民族の一員と見做されぬと共に、他方アビシニアのファラシヤ人其の他の如く、ユダヤ教を信奉してもユダヤ人と血縁關係なきものは、之亦同然であると言ひ得るであらう。

之を要するに、ユダヤ民族を決定するものは、パレスチナ・ユダヤ人の子孫たるアシケナジムとセファルジムに於ける血族關係であり、ユダヤ教を基調とする精神の連帶感であり、その限りに於て地上に於ける他の凡ゆる關係に對して一個の結合せる社會を構成せんとする意識であり、且つその意志であるとしなければならぬ。

最後に、近年國家の政策として排猶政策を實施しつゝある獨、伊兩國に於ては、ユダヤ人の限界を、前者に於ては「人種上完全なるユダヤ人祖父母少くとも三人を持つもの、祖父母のうち二人の完全なるユダヤ人を持ち、ユダヤ教を信奉するか或はユダヤ人と結婚するもの、祖父母の一人が完全なるユダヤ人にして、本人がユダヤ教を信奉するものは、いづれもユダヤ人である」と見做し、後者に於ては「兩親共ユダヤ人たるものより出生するものは、宗教の如何を問はずユダヤ人」と認めてゐることを附記することは強ち無益であるまい。尙此の場合、兩者共その血族關係に重點を置いてゐることは、人種の純潔性を主張する立場から當然と考へられるが、イタリーが宗教を全然問題とせざるに反し、ドイツに於てはユダヤ教の信奉如何をユダヤ人決定上の一要件としてゐることは、興味ある點であらう。

第二章 ユダヤ問題の本質

ユダヤ民族の歴史を顧みて、誰しも驚嘆を禁じ得ぬことは、彼等がその國家の獨立を失つて約二千五百年、國土を追はれて約一千八百年の今日まで、凡ゆる迫害を受けつゝ、而も尙民族として旺盛な存在を続け居ることであらう。即ち彼等が政治的獨立を有してゐた時代の周圍の諸民族の名稱が、一般的には既に忘れられ、彼等の壓迫者たりし當時の世界的強國の諸國民すらも全然その存在を失つてしまつた今日、彼等は世界の殆ど到る所に居住し活動し居るのであり、その間彼等が絶えず迫害され居ること自體が、彼等の凡ゆる方面に於ける旺盛なる存在の生きた證據でさへあるのである。

所謂ユダヤ問題は、ユダヤ民族の斯うした旺盛なる生命力から生起したものと云へぬことがない。ユダヤ國復興を目標とするシオニズムの始祖として、全世界ユダヤ民族から絶大の尊敬を拂はれてゐるテオドル・ヘルツル博士は、一八九六年その筆になる「猶太國」なる檄文中に於て、「ユダヤ問題は中世紀の遺物で、ユダヤ人在る所には必ずこの問題あり、而してこの問題のない處にはユダヤ人が之れを携へて行く。我等は迫害の無い所を求めて行くが、行けば自ら迫害が生じて来る。今やユダ

ヤ人は反猶運動を英國に移入しつゝある。又彼等は已に米國に輸入した」云々と述べてゐる。

このユダヤ人の在る所必ず之に隨伴するユダヤ問題とは然らば何であるか。之に對して我々に明答を與へてくれるものは、ユダヤ民族の過去の歴史であらねばならぬ。而してそれに依ればユダヤ問題とは、極めて抽象的ではあるが、他民族社會に入れる少數者としてのユダヤ民族の不同化性と天賦の優秀素質に基く他民族との競争、對立を中心に捲き起される兩者の相剋を、その本質とするものの如くに考へられる。更に之れを逆に表現すれば、少數民族としてのユダヤ人にこの不同化性、この優秀素質がなかつたならば、ユダヤ問題はあり得なかつたであらうし、ユダヤ民族なるものも今日までその存在を恐らく維持し得なかつたであらうことが、容易に判斷されるのである。

かくしてユダヤ問題は、ユダヤ民族が世界各地に分散し、他民族社會に寄生するに至つた西曆紀元二世紀中葉から既に發生したものと見るべきであり、それはユダヤ民族の強靱なる獨自な發展性に對する排撃——所謂反猶運動の基本的な形をとつて展開され來つたものと言へるやうである。

第三章 古代及び中世に於けるユダヤ問題の特色

ユダヤ問題の發生並にその史的發展の諸要因を具體的に詳述することは、本稿のよくするところでない。茲では、その基本的な諸點を歴史的に一瞥し、本問題の將來への見透し並に我日本の本問題に對する關係の闡明に資することとする。

先に筆者は、本問題の本質が少數者としてのユダヤ民族の不同化性と優秀素質に基く他民族との對立、相剋に在ることを指摘した。兩者は謂はゞユダヤ民族の一貫した性質であるが、これがユダヤ問題の或は反猶思想の二大要因をなすに至つた過程を明かにするためには、少しく説明を要することと思ふ。

第一節 不同化性とユダヤ教

順序として先づ不同化性の問題に就て述べねばならぬ。「相違は敵意を生む」とは社會學の一原則

であるが、この不同化性こそ、歴史的に觀てユダヤ問題の終始一貫した第一義的原因であり、古來反猶思想の根本的な培養素をなし來つたものと言へる。

ユダヤ人の不同化の根本理由を明かにするには、ユダヤ人とユダヤ教との關係に立ち入ることが絶對に必要である。即ちユダヤ人が他民族と同化せぬと云ふ根本理由の中には、第一にはユダヤ人の所謂選民意識がある。選民意識とは、ユダヤ人は他の人間とは根本的に異つたものであり、特にエホバの神より世界救済の特殊の使命を蒙つてゐるといふユダヤ人自身の意識である。この意識は如何にして彼等の間に成立し、歴史的大勢力となつたか。それには彼等ユダヤ人の大首領としてのモーゼからの傳統が權威をもつて物を言つてゐることは指摘するまでもない。この選民意識によつて、この意識と共に發達したユダヤ教諸經典、タルムード等の影響もあつて、ユダヤ人間には特殊の慣習が成立した。主なるものとして婚姻の慣習を擧げることが出来る。ユダヤ人はユダヤ人以外のものとは原則として婚姻を行はぬことになつてゐる。斯くしてユダヤ人は飽くまでもユダヤ人自身の流儀を押し通して、己の方から進んで同化を求めないことになる。ユダヤ人には彼等自身の年曆もあり、安息日もあり、他民族とは異つた食物の調理法があり、如何なる國土に籍を置き、如何なる社會に生活根據を定めようとも、ユダヤ人はユダヤ人として互にユダヤ人とだけの交通を重んじ、その所屬する社會、國家又は同居他民族の利害は常に第二義的以下のものに取扱はれる結果となるのである。

ユダヤ民族の斯かる環境に順應せざる不同化性こそは、同民族が國土を失ひ世界各地に分散生活を

始めて以來、到る處に惹起された、同民族に對する警戒・排斥——所謂ユダヤ問題の根柢の一半をなすものである。而して現在と雖もこの事情には殆ど變化を認め得ぬのであるが、時代的に觀て、かかる傾向の特に著しかつたのは古代及び中世に於てであつたと言へる。

第二節 宗教的反感

次に、右の不同化性の問題と離るべからざる關係に於て、古代から中世にかけて、反猶思想及び運動の三つの直接的なファクターが派生的に存在した事實を看過することが出来ない。その第一は、ユダヤ人が選民としての種族的優越感を基調とする獨善的排他的傾向の強いユダヤ教を堅持し譲らぬところから生起した基督教徒たる一般西洋人との宗教的對立、反感である。人間の宗教心が熱烈であつた初代より中世にかけて、神の子基督をユダヤ教に對する反逆者呼ばはりするのみか、之を十字架にかけて虐殺したユダヤ人は、最も憎むべき民族であり、之が排撃の主要原因となつたことは、容易に首肯される。

憎むべき磔刑者——ユダヤ人、新來の少數者——ユダヤ人の他と融和せざる獨自の生活態度は當然に彼等の排斥運動を一般基督教徒の間に惹起せずには措かなかつたのである。

第三節 社會、經濟的反感

第二の派生的ファクターは、既に叙上の如き多分に宗教的な理由から醗酵された反猶思想及び壓迫の結果として、彼等ユダヤ人が營むに至つた特異の社會經濟生活の中に求めなければならぬ。ユダヤ民族が國を失ひ、各地に離散後受けた最初の壓制と迫害の主なるものを擧ぐれば、當該國家から一般國民並の權利を與へられなかつたことは言ふまでもないとして、特に土地所有の禁止、制限、或は極端な居住制限の行はれたことであつた。その結果、彼等は古代に於ける農業生活を離れて、都市を中心として集まる傾向を生じ、所謂「ゲットー」(ユダヤ窟)に入り、一般國人と隔離された生活の中に、手工業や特に商業(特に行商)或は更に金貨業といつた限られた職業に従事した。その結果は、彼等の多くが商人となり、高利貸となつて蒙昧民衆の中間搾取に従事し、民衆困窮の一禍因を作り、他面又酒類釀造から之が販賣、さては一般人の忌む酒場、賭博場、遊女屋等の經營に當つて、健全な社會生活、公安の破壊者と見做されるに至つた。そして此等のことは、凡ゆる禁制、制限の網をくゞつて徐と而も執拗に繰展げられ、一般民衆のユダヤ人に對する反感、憎惡に拍車をかけたのである。

第四節 心理的反感

最後に、古代から中世にかけて反猶思想及び運動の第三の派生的ファクターとなつたものは、叙上の諸理由から當然に生じた迫害の結果として、次第にユダヤ人の中に培はれた特異の性格である。之を具體的に示せば、(一)神經質にして猜疑心深きこと、(二)物質欲旺盛にして營利、射利に走り、他人の迷惑を顧みざること、(三)横着にして且狡猾なること等々であつて、斯かる嫌惡すべき民族的個性の歴史的な生成こそは、當然にユダヤ人に對する非ユダヤ人側の反感を咬る心理的要素となつたことを否定し得ないのである。

古代及び中世に於ける反猶思想及び運動は以上の如き基本的な諸理由の上に發生したものであり、それは中世初期から中期にかけて特に熾烈を極めた。即ちこの時代に於ては、ユダヤ民族迫害は、時には單なる誤解や流言、蜚語によつてさへも激成され、現代の我々の想像も及ばぬ慘酷さを以て展開されたのである。而して「ゲットー」(ユダヤ窟)或は一定地域を限られての悲惨な隔離生活を始めとして、一般職業其他社會生活上に於ける諸制限、財産の沒收、監禁、店舗又はシナゴグ(教會堂)の燒打及び破壊、ボグロム(虐殺)、國外追放等々は斯うしたユダヤ人に對する壓制と迫害の代表的なものであつた。

だが、斯かる悲惨な境涯にも拘らず、或は民族としての斯かる逆境が幸ひしてか、ユダヤ民族がユダヤ教諸經典の教ふるところに従つて、傳統の選民意識を保持し、同族の精神的團結を更に強化さへしたことは、殆んど驚嘆に値するものであると言はなければならぬ。

第四章 近世及び現代に於けるユダヤ問題の特色

第一節 ユダヤ民族の解放と進出

古代及び中世に於けるユダヤ問題の特色が、ユダヤ民族の不同化性を基調に多分に宗教的な色彩を帯び、それが後に至つて漸次、社會、經濟的要素の加味されたものであることは、上述するところにより略明かにされたことと思ふ。然るに近世になり、ユダヤ民族の環境上の激變は、同問題に對しても内容的に相當の變化を與へた。先に筆者の指摘したユダヤ人の天賦の優秀素質を基調とする少數民族としての彼等の各方面に於ける飛躍的進出が、茲に物を言ひ出したのである。

十八世紀のフランス革命と自由主義の勃興は、ユダヤ民族にも解放を齎らした。先づフランスでは同世紀末に宗教の自由が認められ、次いで市民權が與へられた。英國では一八五八年に全然ユダヤ人を解放し、同年西班牙ではユダヤ人排斥を撤廢した。ドイツでは一八六八年ユダヤ人に市民權を與へた。かくてフランス革命の影響は全歐洲に及び、ユダヤ人の「ゲット」は解放せられ、一般の國民と同様になつたのである。

尤もこのことは、反猶の事實の根絶を意味するものではなく、東歐諸國には依然としてその痕跡を残したことは、特に指摘されねばならぬ。即ちロシア、ポーランドといった西歐文化の影響を受けることの比較的遅かつたところでは、多少事情を異にし、帝政ロシアの末期までユダヤ人に對する諸種の壓制と迫害が行はれたのである。

ユダヤ人の解放と共に始まつたものは、彼等の各方面に於ける目覺しい進出であつた。既に中世末期近くには、單なる行商人から店舗の經營者に、手工業者から工場經營者に、單なる金貸からクレヂット機關の經營者へと轉化しつゝあつた彼等は、當時の重商主義、自由主義、資本主義等々擡頭の新機運に乗つて、或は之を促進しつゝ、經濟と言はず政治と言はず文化と言はず次第に頭角を現はし、斯かる傾向は第一次世界大戰を契機として、特に顯著なるものがあつたのである。

いま各方面に亘り彼等の進出振りを詳述することは、本稿の目的ではないが、問題の真相に徹するためには、先づその概況のみにも、理解してかゝらねばならぬ。以下に於て少しく之が細説を試みるであらう。

一、經濟的進出

ユダヤ人が凡ゆるチャンスを利用して進出を示した中でも、第一に擧げらるべきは、經濟界に於けるそれであらう。これは商業、金融方面に比較的自由的な活動をなした過去の環境から見て、當然の

歸結とも言ふべきで、フランクフルト、巴里、倫敦、維納、ネーブルス等を本據に大發展を遂げ、一時歐洲財界に飛ぶ鳥をも落とす權勢を振つたロスチャイルド財閥を始めとして、歐米に於てもアジア大陸に於ても殆んど指導的な勢力を一國內と言はず廣く國際經濟界に振つた幾多の世界に名だゝるユダヤ財閥の發生、存在こそは、この方面に於ける彼等の發展を最も代表的に象徴するものと言はねばなるまい。

次に英・佛・米やナチス擡頭以前のドイツといった主要諸國に於ける比較的最近の（今次大戰前）ユダヤ人の經濟的進出狀況を覗いてみよう。

英國 同國に於けるユダヤ人口は一九三一年度調査によれば三十萬で、總人口に對して僅々〇・六五%を占めるに過ぎなかつた。然るに、その一般的に占むる勢力の著大なることは、佛國と共に雙壁をなし、それがいづれも、彼等の經濟的勢力の基礎の上に立つものであることは争はれぬのである。即ち同國ユダヤ財閥の巨頭はロスチャイルド家であるが、これが樞軸となつて英國金融經濟に指導的地位を占める外、一般產業界に於ても人口と比例のとれぬ程多數の財閥巨頭を出し、重工業方面に於ては左程ならずとも、家具製造及び販賣、映畫、裁縫業、化粧品業をほとんど獨占し、煙草、電氣器具、化學製品、連鎖店事業等に又主勢力を振つてゐるのである。

佛國 今次大戰開始までの佛國財界及び經濟界に於けるユダヤ人の勢力も英國に劣らぬものがあつた。此處でもユダヤ人口は一九三六年度調査によれば二十四萬で、總人口に對して僅かに〇・五七%

であつたが、而も同國の財界及び産業界が代表的財閥たるロチルド家（即ちロスチャイルド家）を中心とする幾多ユダヤ資本家により左右される場合の多かつたことは、周知の事實である。

勿論最近のロチルド財閥には現世紀初頭に於ける如き全能的な勢力は無く、非ユダヤ的勢力と或る程度に経済界の分有を認めねばならなかつた。併しそれにしても、その指導力は微動だもしなかつたのであつて、現に佛國々民経済を構成する金融、商工業界の大半に代表を出し、エルネスト・メルシエを介して石油・電氣に支配的勢力を維持する外、鑛山、運輸、保險、さては水道、瓦斯等の特許事業に至るまで、牢固たる地盤を築き、正に佛國全經濟の運轉のハンドルを握つてゐたのが、今次大戦直前迄の状況だつたのである。

ロチルド家に續くユダヤ系財閥又は著名財界人としては、更にラザール、ウォルムス、ステルン、フィナリー、ドレイフュス、カアン・ダンベール、ブロック、ゴールドスミス、サミュエル等々の諸家を挙げ得るであらう。

米國 米國は今大戦までは世界に於て最大多数のユダヤ人口（一九三七年度調査によれば四百八十三萬餘、對總人口比率一三・七四％）を擁し、一般にその経済的勢力も何れの國に於けるよりも大なる如く考へられる傾向がある。これは、在米ユダヤ人口の殆んど九五％が都市生活者で、而もその約半數がアメリカ國家生活の中樞をなす紐育に集中してゐるところから與へられる印象が多分に手傳つてゐるのであるが、事實はそれ程でなく、アングロ・サクソン系とは比較にならぬことを、一應認めねばな

るまい。特に金融方面に就て見るも、一流財閥としては、シッフ一家を中心とするクン・ローエブ商會を擧げる程度であり、紐育手形交換所會員たる十九大銀行の重役にしても、總數四百二十名中ユダヤ人は三十名程度である。

併しユダヤ資本の性格は必ずしも個々の大財閥のみによる活動を特色としない。彼等同族資本の見えざる協力、連繫こそ、その恐るべき力であるとすれば、米國に於けるユダヤ人の財的潜勢力は確かに一大威力であると見るのが真相に近い。この間の消息を物語るものとして、次の二事例が擧げられる。第一は、一九一二年ヤコブ・シッフ等を中心に團結したユダヤ財閥の専横が米國上下兩院の問題となり、之が真相究明のため組織された調査委員會の調査報告が、ユダヤ系銀行トラストの存在すること、それが五個の主要銀行と百十二個の重要な銀行を管理すること、而して此等の銀行が總資本額二百二十二億餘弗を擁し、米國全土は勿論、海外にまで勢力を伸張し居ることを明かにし、世人の耳目を聳動したことである。

第二の事實は、曾て米國が世界大戦後の不況に襲はれ、閉鎖銀行數實に七千八百餘行に及んだ際、その九割までが非ユダヤ系銀行で、而もその大部分がユダヤ系資本の併呑するところとなつたことである。

以て米國に於けるユダヤ系金融資本の實勢力を窺知するに足るであらう。

次に産業界に於ける勢力は如何。この場合に於ても、全體から見て少數勢力たるは免かれぬが、併

し人口比例からすれば實に侮り難きもののあることを知らねばならぬ。いまその進出の著しい部面を求むれば、比較的に勢力の微々たる重工業方面に於て、屑鐵業の九割までをその掌中に握り、銅山業界に支配的地位を占めることは特筆さるべき點であらう。だがユダヤ人の米國產業界に於ける勢力を代表するものは、實に輕工業及び商業方面にあるのであつて、織物、衣類、葉卷煙草等に獨占的經營を行ひ、數種輕工業製品の販賣部面を壟斷し、百貨店事業に著しい進出を示してゐることは、夙に著明な事實に屬するのである。

ドイツ 最後にドイツに於ける進出を見なければならぬ。大體同國がユダヤ人を解放してからナチスの排猶政策實施まで、僅々六十數年の間に發展を遂げたものであるが、その間第一次世界大戰前後の混亂期に際して不動の地盤を確保するに至つたことは、注目さるべき點である。

ドイツに於けるユダヤ人口は一九二五年に於て五十六萬五千、同國人口の一%弱であつたが、そのユダヤ人がドイツ經濟界に於て如何なる地歩を占めたか。ナチス排猶政策實施直前の狀況を見るに、その進出は凡ゆる部面を通じて目立つた中でも、商業及び金融業に於て甚大な勢力を持つてゐた。一例を示せば、金屬取引に於てユダヤ人商會の占むる比率は總體の五七%餘、織物及び衣服販賣に於て四〇%、穀物取引に於て約二三%、銀行業に於て一九%であつたが、就中、同國一流銀行の理事及び監査役級が壓倒的にユダヤ人により占められてゐた事實、伯林商工會議所を始め諸取引所の幹部の椅子が過半數ユダヤ人の掌中にあつた事實等は、その商業界特に金融界に於ける勢力の如何に著大であ

つたかを證明するに足るのである。

工業方面の勢力は商業、金融に於ける程ではないにしても、エミール・ラテナウの創設にかゝるA・E・G會社の如きは著名なもので、其他にも相當數の會社が擧げられ得たのである。

x

以上を要するに、ユダヤ民族解放以來、彼等は私的經濟競争場裡の諸條件に素晴らしい順應能力を示して、他民族とは問題にならぬ程の比率を以て先づ經濟方面、就中金融及び商業部面に進出したものであることは否定し得ぬと共に、この方面に於ける彼等の勢力が常に國際的色彩濃厚であり且全世界に互り同族的連繫の緊密なる點は、特に注目されなければならぬ。

尙ユダヤ民族の經濟的進出に關聯して最後に指摘すべきは、彼等の専門的自由職業、例へば辯護士及び醫師等への目立つた進出で、これは主として都市に集中生活してゐる彼等として又當然の現象とも言ひ得べく、斯かる傾向は特に佛國及びナチス以前の獨逸に於て著しかつたことである。

二、新聞通信及び映畫事業への進出

次にユダヤ人の進出の目立つて著しい方面に新聞・通信及び映畫事業がある。先づ新聞に就て見れば、一部論者の説く如く果して歐米言論機關の八〇%が彼等の掌中にあるやは、多大の疑問なしとせざるも、その勢力には確かに大なるものがあるのである。就中佛國はその最たるもので、同國五大新

聞を以て稱されたブテイ・パリジャン、マタン、ジュールナール、ブテイ・ジュールナール、エコ・ド・パリを始めとして、全國主要新聞約八十種の中大半はユダヤ系を以て目されてゐた。

又米國に於ては倫敦タイムスと雙稱される紐育タイムス以下二十數種の有力紙（總發行部數約百五十萬部）がユダヤ勢力の支配下にあると見られ、ハースト系新聞（五百五十萬部）やバタソン・マッコイミック系新聞（二百三十餘萬部）、スクリップス・ハワード系新聞（百八十萬部）等に比較して一見微々たるものではあるが、併し財界、産業界、學界等に於ける彼等の勢力や思想的影響、乃至大都市方面に於てユダヤ系百貨店が廣告主として此等日刊新聞に對し相當の睨を利かし得る地位にある事實等に想到すれば、同國新聞界に於けるユダヤ的勢力には、發行部數を超越して大なるものあることは否定出來ぬのである。従つて米國に於て、一部の者の間に、新聞はニュース・ペーパーならで別名ジュース・ペーパーを以て呼ばれ居ることも、強ち根據なきこととは言はれぬであらう。

英國に於ては、全國九大新聞の所有主中ユダヤ人はサウスウッド卿一人を算へるのみで、表面支配的勢力と云ふ程ではない。併し同卿がデーリー・ヘラルドを含む國內で最も有力なる新聞系の一つを支配し居ることは事實で、その意味に於て英國新聞事業に於けるユダヤ人の勢力も、決して輕視出來ぬのである。

ヒットラー政權出現以前の獨逸に就て見れば、一九一二年「新聞の偉大なる力」の著者エベル博士は、當時既にドイツ新聞の四分の三がユダヤ人の所有か或はその支配下にあつたことを指摘して居り、第一次大戰に際しては、官報であつたベルリネル・ターゲブラット、ミュンヘネル・ノーエステン・ナハリヒテン兩紙を始め此等一聯のユダヤ系新聞が幾多國家に不利なる記事を掲載して後日に問題を殘したことは著名な事實である。

右により、ユダヤ人が新聞界に於て、經營者として或は資本家として如何に著しい勢力を持つに至つたかは、略窺し得るであらう。併し一方、新聞事業に於ては、ニュースの單なる印刷配給よりも、記者の活動により、又通信社や世界各地のニュース源よりニュースを蒐集する仕事の方が、より重要であることを忘れてはならぬ。而して今日世界通信事業界に覇を稱ふる佛の「アウアス」、英の「ルーター」、米のアソシエテッド・プレス（略稱A・P）、ユナイテッド・プレス（略稱U・P）、數年前まで中歐通信界に幅を利かした獨の「ウォルフ」等の世界的大通信社が、いづれもユダヤ人の支配下にある事實に徴すれば、この方面に於けるユダヤ的勢力は、新聞社自體におけるよりも遙かに大なりと見做さねばなるまい。

其の他一般出版業、放送事業等に於ける進出も決して輕視出來ぬが、最後に特筆さるべきものは映畫事業のあることを指摘しなければならぬ。これは周知の如く殆んど一般的現象とも言ひ得るのであるが、特に米國に於て、それは殆んど彼等の獨占經營に歸し、英佛、其他諸國亦之に準ずる状態にあると言はれるのである。

三、政治的進出

英國 ユダヤ民族が諸國に於て經濟的に勢力を占むるに至つた當然の結果は、政治方面に於ける擡頭であつた。斯かる現象が就中、英國に於て最も著しいのは、彼等が同國に於て最も早く經濟的地盤を確立せるためであり、政界と言はず上層方面への勢力滲透は、正に驚嘆に價するものがあると言はれる。近世に於ける著名政治家として、同國が既にシャフツベリー伯（ヴィクトリア女皇時代の首相）、ビーコンスフィールド伯（保守黨首領、藏相、首相）、グラッドストーン（自由主義政治家、數次に互る首相）、レーディング侯（大審院長、印度總督、外相歴任）等の錚々たるユダヤ人を出し、近くは労働黨領袖にして文相、内相、外相に歴任したヘンダーソン、三度藏相に任じたスノーデン男、内相、外相を歴任したサイモン等を擧げ得べく、更に一昨年（一九〇〇年）のネウイル・チェンバレン内閣が陸相ホア・ベリシア、公共土木相フリップ・サッスン、經濟顧問リース・ロスの三ユダヤ人を擁し、其他閣僚中首相チェンバレンを始め外相ハリファックス子爵、海相A・ダフ・クーパー、商相オリウアー・スタンレー、自治領相スタンレー卿及び樞密院議長ヘイルシャム子爵、大法官モリアム男爵等が、いづれもユダヤ人と親戚關係にあつたことを想へば、英國政界及び特に上流階級に於けるユダヤ人の勢力を窺知し得て餘りあるものがある。

佛國 英國に次いでユダヤ人の政界進出の目立つてゐたのは恐らく佛國であらう。フランス革命前

に多數のユダヤ人が政治的暗躍をなした歴史的事實は暫く措く。現代の政治家に就て見ても、大戰直後の首相兼外相として、次いで大統領として政界表面に活躍したミルラン、大戰中から戦後にかけて數次首相又は陸相を勤めたバンルベールを始めとして、近くはレオン・ブルーム、マンデル、ジャン・ゼー、レイノー等の一流政治家を擧げ得ることは、以てその政治的に有する勢力にも大なるものあつたことを察知し得るのである。

ドイツ 同國に於けるユダヤ人の政治的進出は、經濟的にも大體同様ではあるが、第一次大戰を機會として特に顯著なるものあつたことは明かで、それがナチス擡頭に伴はれ終焉を告げた譯である。大戰時に於けるカイゼルの財政顧問マックス・ワルブルグや、漢堡汽船社長バーリンの資源局長官としての縦横の活躍から、革命に於けるランツベルヒ、リプクネヒト、ローザ・ルクセンブルグ等の活動、革命後の共和新政權へ初代大統領エーベルト以下、ハーゼ、ラテナウ、コーン、プロイス等々の有力ユダヤ人閣僚の送り出された事實等は、大戰時から戦後へかけてのドイツ政界に於て占めたユダヤ人の華かな地歩を象徴するものであつたと言へるのである。

米國 米國は世界最大のユダヤ人口を擁する國であり、歴史の新しい國だけにユダヤ人迫害も餘り行はれなかつた割には、表面、西歐諸國に比し經濟的に特に目立つやうな勢力を持つて居らぬことは前述した如くである。政界方面に於ても略同様な事が言へるのであつて、著名な政治家としては過去に於て二十九代大統領ハーチングがあり、歴代大統領の影武者として幾人かのユダヤ人の活躍（例へ

ば第一次大戦後の平和會議指導者たりしウイリソン大統領に於けるバラザの如し）が記憶される程度である。米國政界に於けるユダヤ人の擡頭を云々し得るとすれば、それはユダヤ人の血を承け繼ぐと言はれるルーズヴェルト現大統領就任以來のことであつて、同氏を取巻くブレン・トラストは殆んどユダヤ人の固めるところと言はれ、外に財務長官モーゲンソー、大審院判事ルイス・ブランドス、ニューヨーク州知事レーマン、上院議員ボラー、ハイラム・ジョンソン等の著名士を擧げることが出来るのである。

舊ロシアとソ聯邦 舊露國のユダヤ人は中世時代から一定の都市及び區域を指定されて其處に居住し、最も悲惨な迫害の下に置かれてゐたが、それでもアレクサンドル二世の改革以來、一部の者は解放され、それ以外の者でも贈賄や財力にものを言はせ、或は改宗や高等教育を受くることによつて、事實上の同權を與へられ、自由な活動をなし得るに至つた。ロシア工業や内外商業に於て彼等の果たした役割は大きかつたし、ユダヤ人手工業の發達も目覺しかつた。その結果、一九一七年革命直前に於ては、ロシアの銀行の大部分及びそれを通じて工業と商業の著しい部分は、既にユダヤ人の支配を受け、一方高等教育を受けたものは、文學、藝術方面に進出し、又殆んど過半の言論機關、出版社會を掌中に收め、所謂輿論なるものに影響を與へてゐた。この事は既に増大しつゝあつたユダヤ資本の勢力を反映したものであることは言ふまでもないのである。

だが、ロシアに於けるユダヤ人の進出の最も目覺ましかつたものは、一九一七年革命を契機として

の政治的進出であらう。帝政ロシアのユダヤ人に對する全政策は、その大多數を形成するユダヤ人インテリゲンチヤや労働者を過激主義諸黨派の腕の中へ投げ込むために樹てられたやうなものであつた。ロシア社會民主労働黨の幹部中に、労働運動史上有名なメンシエウイキーのダンやアクセリロド、アルトフ、リーベル等々のユダヤ人領袖を見出すことに、不思議はない筈である。ツァーの専制政治の敵であつた此等の人々は、今度はその精神的後繼者たるボリシエウイキー獨裁に反對したが、共産主義が勝利した結果、ボリシエウイキーの方が世界的に有名になつた。それはトロツキイ、カールメネフ、ジノウイエフ、リトウイノフ、ラデック、ヨッフエといつた面々である。だが、メンシエウイズムが勝利しようとボリシエウイズムが勝利しようと、それはどちらでもよい。要は數多の指導的なユダヤ人出身革命家と反政府的感情に満たされたユダヤ人大衆の最も有力な参加により帝政ロシアの専制政治が覆へされたのであり、それが動機となつて、ユダヤ人のソ聯邦に於ける驚異的進出となつたのである。

事實、ソ聯邦政權下に於けるユダヤ人は種族又は民族として完全に解放され、反猶主義の運動も禁ぜられたのであり、その基礎の上に彼等は、當時の狀況ががら明きになつた諸官廳の椅子をユダヤ人インテリゲンチヤによつて満たさねばならなかつた特殊の事情も手傳つて、ソ聯の政治、經濟と言はず、凡ゆる方面に法外の進出を示して要路を占め、或る意味ではソ聯ユダヤ人は世界中で最も順境にあると言へるのである。だが、一部の人々の考へる如く、果してソ聯を動かすものはユダヤ人なりやの問

題に至つては、かなり議論の餘地が存するものであり、時代の経過は寧ろその根據の次第に薄弱となりつゝあることを茲に斷つて置かなければならぬ。

國際政治への進出 國內政治に進出したユダヤ人が更に國際政治に對しても重要な關與をなすに至つたことは、當然の順序であらう。

第一次世界大戰に際し、參戰諸國民の疲弊に乗じ非常な飛躍をなし、莫大の利益を得て、斷然その勢力を伸張したものはユダヤ人であつたが、この財的勢力の増大と併行して國際政治上に於けるユダヤ勢力も一躍擡頭するに至つたことは、容易に首肯されることである。例へば大戰後の媾和會議に於て英佛聯合國と言はず、獨逸側からも驚く程多數のユダヤ人が代表又は委員、顧問として參加したことは周知の事實であるが、同會議を機會に世界各國の政府を動かし、その政治家を操り、二千年の大念願たるユダヤ國を故國パレスチナに建設するに至つたことは、ユダヤ民族の政治的進出とその實力を最も端的に立證したものと云へるのである。

更に斯うした會議から生れた國際聯盟がユダヤ勢力と無關係であり得なかつたことも當然であつた。國際聯盟を提唱した米大統領ウィルソンの裏面にあつて、之を推進、實現せしめたものがユダヤ人秘書バラヂであつた事實、爾來聯盟を固める幹部級に殆んどユダヤ人を見るの事實等は、同聯盟がユダヤ人の國際政治的進出に負ふところ大なることを立證して餘りあるのである。數年前我國の脱退當時に於ける聯盟幹部の左の如き陣容を想起する時、蓋し思ひ半に過ぐるものがある。

聯盟事務總長	ド	ラ	モ	ン	ド	(英國籍ユダヤ人)
同 次長	ア	ブ	ノ	ー	ル	(佛國籍ユダヤ人)
聯盟交通部長	ハ	ー			ス	(佛國籍ユダヤ人)
同 衛生部長	ラ	イ	ヒ	マ	ン	(ポーランド籍ユダヤ人)
同 經濟部長	ソ	ル	タ	ー		(ドイツ籍ユダヤ人)
同 宣傳部長	コ	ン	メ	ン		(國籍不詳ユダヤ人)

其他聯盟關係の著名ユダヤ人としてチェッコスロワキヤのベネツシユ、西班牙代表アダリアガ、白耳義代表イーマンス等は我等の記憶に未だ新たなるところである。

四、社會急進思想及び運動に於けるユダヤ人

古來ユダヤ民族に急進思想又は革命思想は附き物の如く考へられてゐる。これは彼等のユダヤ教に培はれた旺盛な選民意識とそれに餘りにもそぐはない歴史的環境上から觀て、或ひは當然とも言はるべきであらう。紀元二世紀中葉、羅馬政府最後の彈壓により故國を追はれ流散の生活に入つてからの彼等を支配した思想は、征服者に對する革命と祖國の復興であつた。而してそれはエルサレムへの復歸を實現するまでには至らなかつたとしても、羅馬帝國をば結局覆滅せしめたのである。異民族からの壓迫が、彼等の革命思想を濃化する逆作用を最も原始的な形に於て如實に現はしたものが、右の事

實である。

中世に入つてからユダヤ民族の上に加へられた凡ゆる社會的政治的迫害は彼等をして近世に於ける自由主義思想と民主主義思想の醗酵、勃興に著しい程度に参加せしめたことも事實であるし、近代資本主義興隆期と近代國家生成期にあつては、一般的現象としての社會分化による諸階級間の矛盾、相剋に乗じて、自己解放のための各種社會、政治運動に被壓迫諸階層と共同して起ち、時には之に指導的役割を演じたことも否定し得ない。

既に近世史の初頭を飾るフランス革命に於て、彼等ユダヤ人が既に彼等の影響を少からず受けてゐたフラン・マソン（又はフリー・メイソン）結社を通じて有力な關與を示したことが、カール・マルクスやラサール以下の左翼思想家を始め諸國に於て左翼諸政黨の幾多積極的な闘士を出したことが、近くはロシア革命に於けるトロツキー、ジフウイエフ、カーメネフ、ヨッフエ以下無數の錚々たる革命指導者、ドイツ革命に於けるリブクネヒト、ハンガリー、スペイン革命に於けるベラ・クーン、愛蘭革命のド・ヴァレラ及びローバート・ブリスコ、青年土耳古黨革命に於けるジャウイッド・バシヤ等のいづれもユダヤ人たるの事實等々は明かに之を證明するのである。

ユダヤ民族の急進思想及び運動に於ける斯かる役割は、ユダヤ人側學者の説く如く、遠く舊約聖書の社會律法や豫言書に由來するメシアニズム（世界救済思想）の社會的領域への倫理的發展といふ言葉をも以つて、補足的に説明され得るかも知れぬ。併し現實は概して理想をリードするを常とする。ユダ

ヤ人排斥がユダヤ人の生活を苦しいものになつた諸國、即ちアメリカ、イタリー、西部ヨーロッパ、スカンジナビア特に幾世代の間ユダヤ人に對する待遇が紳士的であつたスウェーデンに於けるユダヤ人の政治的傾向が概して穏和であつたこと、民族としてのユダヤの急進主義又は過激主義が、ユダヤ人に對する壓迫が強く時には絶望的狀態さへも現出した東部ヨーロッパやドイツにしか存在しなかつた事實は、彼等に對する虐待が彼等をして急進的に、時には現状破壊的にならしめる根本原因であることを物語るものと言へるのである。

ユダヤ人が解放以來、經濟的に著しい進出を遂げて幾多の大資本家さへも出した反面に於て、又幾多の革命家を出してゐることは一見矛盾の如くであるが、ヘルツ博士は前掲檄文「猶太國」中に於て、之を次の如く説明してゐることは、注目されてよい。

「吾人ははけ口の無いところから、財産を増大すると同時に、社會的危險分子となるところの中流知識階級を拵へることになり、教育あつて財産の無いユダヤ人は、現今悉く社會主義者に落ちて行く。社會的闘争が吾人の背に於て行はれるのは、吾人が資本家的にも又社會主義者的にも顯著な地位にあるからである。」

又曰く、

「ユダヤ人に對して不利を計らうとしても、それは斷じて出來ない。ユダヤ人の法律上の同權が一度成立した處では、之を廢止しようとするれば直ちに凡ゆるユダヤ人は貧富を問はず革命黨に投ずるから

である」と。

即ちヘルツ博士自身ユダヤ人を大體資本家と革命家の二種に分類してゐるのであり、而もそれが必要に應じ貧富を問はず革命運動に投じ得ることを認め居るのであつて、環境の改善されぬ限りユダヤ民族が全體として傳統的に急進主義者の素質を具へてゐること、又その故に近世急進思想に於ける彼等の顯著なる役割をも認めぬ譯に行かぬのである。

尙ユダヤ人の抱懐する急進思想が、彼等が國土無く各民族國家に寄生する特異の事情から、概して民約論的自由主義社會の現出を希求し、進んでは窮極の目標を國際主義に置くことは、注目すべき特色としなければなるまい。

x

最後に、ユダヤ民族の近代社會思想及び運動上に占むる地位をより判然せしめる上に一言觸れねばならぬ點は、フリー・メーソン・リーとブナイ・ブリスによる秘密結社運動であらう。

前者のフリー・メーソン・リーとは世界的秘密結社で、起源は非常に古いが、大體十八世紀頃から英國を根據として歐米諸國に於て組織的な發達を遂げ、今日に及んでゐる。フリー・メーソン運動が從來屢々急進思想、國體破壊の原動力をなしたことは、歴史上著明な事實であつて、之がため存在を禁止され居る國々もあるが、併し全般的には依然として世界的一大勢力をなしてゐることは事實である。そのモットーとするところは、自由、平等、友愛であつて、各結社員は相互に國家及び民族を超

越して兄弟と呼び、最後の目的をフリー・メーソンによる世界共通の共和國建設に置くものと言はれてゐる。

このフリー・メーソン結社へのユダヤ人の入社は、十八世紀に至り認められた程度であるが、そのモットーとするところがユダヤ民族の前記國際主義的傾向に多分に合致するところから、忽ちユダヤ人結社員の激増となり、十九世紀末には、既にユダヤ人の左右するところとなつた程、同結社運動に於ける現今のユダヤ的勢力は大きいと見られてゐる。

因みに、最近没落までのフランスは、大革命以來このフリー・メーソン(同國ではフラン・マソンと呼ぶ)の影響を最も多く受けて居り、歴代の政府其他の要路がいづれも同結社員の固めるところであつたことは、夙に著明な事實に屬する。

後者のブナイ・ブリスは十九世紀中葉紐育に始めて成立を見たユダヤ人のみのフリー・メーソン結社で、爾來全米と言はず歐洲諸國にもその組織網が擴められ、所屬結社員は秘密指令によりフリー・メーソン結社にも加入し、之がユダヤ化の原動力をなしてゐる。ブナイ・ブリスがユダヤ人に關する各種問題に對して偉大なる影響と指導力を有し、他面世界の急進過激思想及び運動の上に隠然大なる足跡を残してゐることは、少しく史實の裏面に徹する者の見逃し得ぬ點であらう。

五、藝術及び學術界への進出

藝術及び學術方面に於ても近代のユダヤ人は法外に多數の代表者を出して居り、茲に之を列擧するの煩に堪へぬ程である。文學者、劇作家、俳優、器樂家、作曲家、畫家、彫刻家等に、近代藝術の優れた幾多の戰士が輩出した外、學術界に於ては醫學に、物理學に、心理學に、哲學に之亦世界一流の多數名士を送り出してゐるのである。

智的水準のバロメーターと見做されるノーベル賞受賞者中に、ユダヤ人の占むる率の大なることも、この方面に於ける彼等の進出の如何に著しいかを立證するものでなければならぬ。即ちノーベル賞設定の一九〇一年以來三七年迄の受賞者數は百九十五名に達したが、その中ユダヤ人は十九名で、總數の九・七%を占めたのである。歐洲總人口に占むるユダヤ人の比率が一・八五%、北米のそれが一・九四%なることに想到すれば、ユダヤ人受賞者の比率はその人口比率を遙かに越すものであることが判る。因みにユダヤ人受賞者を分類すれば、物理學—六名、醫學—六名、化學—四名、平和宣傳—二名、文學—一名である。

第二節 反 動

ユダヤ民族の解放とそれに因る進出が、その反面に於て彼等にとつて二つの否定的な影響——反動現象を齎らしたことは、歴史の皮肉であらねばならぬ。その一つは同化思想の出現による民族的傳統精神の弛緩、崩壞の誘致であり、他の一つは彼等の飛躍的進出に因る反猶思想の激烈な形に於ての再擡頭である。

先づ第一の場合から觀察しよう。

一、同化思想の彌漫と民族精神の崩壞

ユダヤ民族解放の結果として、彼等の間には好んで他民族と同化しユダヤ教を離脱するものが續出した。中にはユダヤ人たることを忘れ、又はユダヤ人と認められざることを以て誇りとし、之により自己の社會的地位を向上し、自己の幸福を計らうとするユダヤ人さへ現はれるに至つた。「ユダヤ人は民族にあらず」と宣言するユダヤ人の出現し始めたのも此頃のことである。

ユダヤ人の斯かる新傾向は西歐を風靡し更にアメリカにも波及したが、之は正しく選民——ユダヤ民族の自滅を招來するものとして、同族指導層を狼狽せしめたことは當然と言はなければならぬ。

然るに、ユダヤ民族の時流に乗つた改宗同化思想は、幾何もなく行き詰まり、その氣勢を著しく殺がれて現在に及んでゐる。その理由として、次の事情が擧げられるのである。即ちユダヤ人が縦ひ基督教に改宗し他民族の風を装うても、彼等の面貌や血液の相違、さては、それらに纏綿する傳統的な或は潜在的な嫌惡感、實生活上の激化された諸矛盾までも一變することは出來ず、結局周圍の國民は彼等に對する差別待遇を止めなかつたといふことである。

かくて、彼等ユダヤ人が各國政府から與へられた權利を實際化し且つ之を維持するために然るべき方法を講ぜねばならぬことが一般に痛感されると共に、他方改宗同化風潮により危機に瀕した同族の民族的意識の復興、同族團結を再強化せんとする諸計畫が進められるに至つた。その結果種々の機關、運動が組織され現在に及んでゐるのであるが、中でも同族の名譽の擁護、同族の完全なる解放及び公民權確立等を目的とする「世界猶太人同盟」(一八六〇年創立)の結成こそは劃期的なもので、それに續いて諸國に於けるユダヤ人委員會、近くは世界ユダヤ人大會及びその執行機關(一九三六年第一回大會)等幾多の機關が現はれ、同族の互助、其他右と大同小異の目的を以て、現に活動しつゝあるのである。而して其の間ユダヤ民族傳統の精神的團結を維持強化する上に特に顯著なる役割を演じたものは、ヘルツ博士により提唱された「シオニズム」即ち祖國パレスタインを復興して猶太國を再建せんとする主張及び之が實現を期するシオン團(一八九七年創設)であつたことを否定し得ない。この主張及び運動は、パレスタインが英國委任統治下に入ると共に實現の緒に就いたが、尙依然として彼等の民族的自覺の指導的中心をなしてゐるのである。

第一の反動現象はかくして或る程度に喰ひ止められ、ユダヤ民族は依然としてユダヤ民族たる特色を、換言すればその民族的不同化性を維持することとなつたが、このことが他面傳來の反猶思想に油を補給し次に述べんとする第二の反動現象に間接の地盤を提供するに至つたものである。

二、反猶思想及び運動の再擡頭

第二の反動現象はユダヤ民族の驚異的進出に因る激烈な反猶思想及び運動の再擡頭である。

世に「過ぎたるは及ばざるに如かず」の諺がある。解放されたユダヤ人の目覺ましき進出も、他面に於ては、從來の主として宗教的色彩の濃い一般社會的對立感情を基調とした反猶思想に代つて、近代的矛盾と對立に基づく新しい反猶思想を刺戟し培ふ結果となつた。而してその代表的な事例を、我はドイツに於て認め得るのである。

ドイツでは既に十九世紀後半から斯かる意味の新しい反猶思想及び運動が起り、それが近隣諸國にも反響を呼び起して一般的な反動の魁をなしたが、今その具體的な直接の理由を擧ぐれば、次の如くである。

- 一、地主、軍閥、官僚等の支配階級が、ユダヤ人ブルジョアジーの中に恐るべき新興勢力を認めだしたこと。
- 二、中産階級以下がユダヤ人の中に彼等の安寧を脅威する大資本家を見出したこと。
- 三、大學及び學界に於けるユダヤ人の著しい増加が、一般學界人をして焦慮せしむるに至つたこと。
- 四、ユダヤ人は急進思想の持主としてドイツ的傳統に對し反逆的革命的異分子と認められたこと。
- 五、ユダヤ人は國內に於て依然として獨自の民族的集團生活を止めず、國家中更に依然別個の國家

を形成する傾向強き反面に於ては、國際的色彩又濃厚にして、ドイツ國家の團結に有害と認められたこと。

大體以上の如き諸理由から捲き起された近代反猶主義は、普佛戦争後の不景氣襲來時たる一八七三年に最高潮に達し、同様理由により諸隣國にも波及したのである。併し之が眞に本格的な展開を遂げたのは、第一次世界大戦前後の事に屬し、其處では近代的反猶理由は幾多の新しき事實によつて幾層倍となく強化され、現代反猶主義を生み出したのである。

同じくドイツに於て代表される之が具體的諸原因或は現實的根據とも言ふべきものを次に示さう。

- 一、大戦時に於けるユダヤ人の非愛國的なる數々の行爲が國內の混亂、窮乏に拍車をかけ、敗戦の重要原因をなしたと見做されたこと。
- 二、第一次大戦末期に成立した獨・埃・ソウェイト政權及びその前後の共產主義運動、共產革命失敗後の社會民主々義政府等の中にユダヤ人がかなり重要な役割を占め、他方ドイツを屈服せしめた聯合諸國側に於てもユダヤ人が活躍し、國際聯盟亦ユダヤ人の固むるところであつたこと。
- 三、大戦後の共和政權下に獨逸に入り來つたユダヤ人の數は夥しく、それが既住の同族と共に、政治、經濟、自由職業、學界、言論機關、キネマ等々に於て甚大なる勢力を占め、ドイツ民族に迫り或ひは之を凌駕しつゝあつたこと等。

ユダヤ人憎惡はかくて至極當然に大戦後の獨逸に於て新しく爆發した。而してナチスのヒットラー

こそは、その指導者として現はれ、排猶運動は中世紀的辛辣さを以て、官公職からの罷免、一般職業其他社會生活上に於ける數々の制限、壓迫から財産の沒收、監禁、シナゴグ(教會堂)・店舗の焼打、ボグロム等といった形を取つて現はれ、それは窮極に於てユダヤ人の完全放逐を目標に行はれつゝある。かくて既に幾十萬のユダヤ人が難を國外に逃れんとして、世界の各地に新たなる移動を起してゐるのであり、合邦後の埃太利及び新にドイツ勢力下に入つたチェッコ・スロワキアのユダヤ人も略同様の運命に見舞はれたことは言ふまでもない。

以上はドイツに於ける近世及び現代反猶主義の概況である。然るにナチスの運動は之に止まらず國境を越えて全世界のユダヤ人の地位にまで深刻な影響を及ぼした。といふのは、反猶主義の宣傳はナチス海外宣傳事業の一部として、組織的に行はれたのである。戦争や經濟恐慌や社會不安はユダヤ人の所爲だといふのが常にその骨子をなすのであるが、他の諸國と雖もユダヤ人の進出とその脅威に關しては、既に述べた如く、多かれ少かれドイツと共通のものを持つてゐるところから、容易に反響を呼び起したのである。

新しき反猶主義は先づイタリーに共鳴者を見出し、英米兩國に移植され、ポーランド、ハンガリー、ルーマニアに流行し、デンマーク、スイス、オランダさへも動かし始めた。而してその結果は、英國に於て既に危險状態といふ程ではないが些細な迫害は起りかけてゐたのであるから、未だに中世紀的
反猶の痕跡を残してゐた中・東歐諸國に於ける今後の状態は、推して知るべきであらう。事實、ポー

ランドのユダヤ人は既に露骨な排斥を受け、惨めな境涯に陥りつゝあつたし、ルーマニアやハンガリー
のユダヤ人に對する政府及び一般社會の壓迫も次第に昂じかけてゐたことは、明かな事實であつた
のである。

第三節 近世及び現代に於けるユダヤ問題の特色

一、經濟的・政治的對立

前項述ぶるところの新反猶主義は、近世及び現代に於けるユダヤ問題の核心をなすものであり、そ
れがユダヤ民族の驚異的進出に對する一種の反動現象として現はれたことは、既に指摘した如くであ
る。然るにユダヤ民族の各方面に於ける目立つた進出は、彼等が都市生活者であつたといふ特異な環
境に負ふところがあるにしても、根本に於ては、彼等が長い歴史の上に現はれた幾多の民族よりも卓
越した天性の素質——生來具つてゐる不撓の生活力と精神的優秀素質——を持つてゐるといふ何人も
否定し得ぬ事實によることは明かである。それは遠く數千年の昔、彼等が猫額大の小高原に貧しい農
夫や牧羊者に過ぎなかつた時代に、人類最高の文學を作り出し、今日世界列強の信奉する宗教を發見
した一事でも證明され得るのであつて、國を失つて以來不自然に抑壓されてゐた素質が、今現はれた
したものと同見られぬこともない。

依之觀之、近世及び現代に於ける反猶主義の根本理由は、第一には、彼等ユダヤ人の各方面への進
出が當該國家、社會に於て大多數者を構成する他民族にとつて恐るべき競争者となつたこと、第二に
は、その故に又當該國家の維持發展にとつてユダヤ人の持つ非愛國性と國際性とは、特に危險視され
ねばならぬに至つたこと等に求め得る如くである。而してその限りに於て、近世及び現代に於けるユ
ダヤ問題の本質は何であるかと言へば、独自の發展を遂げんとする寄生小數者——ユダヤ民族の進出
に對する、多數者——他民族の主として經濟的・政治的對立、相剋であるとされねばならぬ。

尤も右の場合に於ても、その根柢に尙古代から中世にかけて蓄積され、それ等の時代に於て反猶の
主要原因をなした種々の素因、——即ち彼等ユダヤ人の一貫した民族主義による不同化性、それと交
互關係にある宗教的反感とか、社會的對立感、更にそれ等に基づく特殊の環境から培れた彼等の忌むべ
き諸性質又は習性に對する傳統的憎惡感——といったものが、潜在意識的に残つてゐて作用してゐる
ことは、決して無視することが出來ぬ。唯併しそれは飽くまでも間接的なものであつて、近代ユダヤ
問題の直接的原因でないことを銘記すべきであらう。

以上は近世及び現代に共通したユダヤ問題の本質であり、同時にその第一に指摘さるべき特色であ
る。

二、現代反猶とヒットラーの民族理論

次に第二の特色に就て述べねばならぬ。それはナチス・ドイツに於て開始された現代の反猶主義が、ヒットラーの「民族理論」によつて更に思想的に體系化され、全く現代的な新装の下に展開されたことにある。ヒットラーの「民族理論」は既に前世紀ヘーゲル學派によつて中歐に普及された「素姓を一にし言語を一にする人民から成る民族國家」の觀念により多分に影響されたと思はれる節があり、決して新規なものとは言ひ得ぬが、それが反猶思想に直接結び付けられたところに、新しい意義を生じた譯である。ヒットラーの「民族理論」の要旨を、彼の「我が闘争」中から拾つてみよう。

「民族的世界觀は、人類の意義をその種族的元素の中に認める。この世界觀は、國家に對して原則的には單に目的のための手段のみを認め、國家の目的は人類の種族的存在の保持にあると考へる。同時に種族の平等性を斷じて信ぜず、種族の多様性と共にその有する價値に差違を認める。そしてこの認識に基いて、宇宙を支配する永遠の意志に従ひ、より良きもの、より強きもの勝利を促進し、より惡しきもの、より弱きものの從屬を期待すべき義務を感じる。」

斯かる種族原則からヒットラーは進んでアリアン民族とユダヤ民族とを對比し、

「アリアン民族は歴史の證明する如く征服者であり、天才的な高等民族であるが、ユダヤ人はその正反對である。彼等は寄生民族として國家も固有の文化も有せず、その熱烈なる民族意識——『選民意識』は惡魔的なエゴイズムであり、彼等の智性は『狡智』である。彼等は自己の目的を達するために資本主義を利用し、共產主義を創造して、世界民族を崩壊せしめんとしてゐる。分裂主義、

享樂主義、虚偽怠慢等々は凡てユダヤ人の手段である。右によりドイツ民族に對するユダヤ民族の思想的方面は明かである。即ち彼等はドイツのポリシェウイキー化を完成し、之によつてドイツの知識階級を絶滅し、かくてユダヤ世界經濟の支配下にドイツ人の勞働生産力を隷屬せしめんとするのである」と。

ヒットラーの民族觀、從つてユダヤ人觀は大體以上の如きもので、理論として極めて生硬であり、それ自身一種の民族的エゴイズムたるを免れぬが、それがナチス・ドイツに於ける反猶運動の思想的根據となつてゐることは争はれぬのである。但しこの新理論が現在見る如き強烈な反猶思想と運動を培ふためには、其處にそれ相當の客觀的狀勢とナチス政權獨得の政策的意義の存することを看過してはならぬ。

周知の如く、第一次大戰後のドイツは、弱體共和政權の下に極端な經濟荒廢から徐々に回復はしたが、ウェルサイユ條約による重壓は殆んど絶望的にドイツの經濟、政治、軍備を束縛し、加ふるに階級闘争による國內の不安搖動は絶えなかつた。一九二九年の世界經濟恐慌は、戦後の大惡性インフレーションにより未曾有の激化を來したドイツ國內の諸矛盾を一層増大せしめ、之に伴ひ國際對立をも再び尖鋭化せしめた。而も此等獨逸の内外諸對立の中に更に民族的對立が深刻に織込まれて存在したことは、既に前項中獨逸に於ける現代反猶主義の現實的根據を述べたところに於て觸れた如く、ドイツ自體に於けるユダヤ人の脅威的進出とドイツを壓迫した四圍の諸國に於けるユダヤ人の勢力に鑑み

る時、容易に判断されるところである。

即ち右の事情からして、第一には獨逸の民族的危機を切抜けるためには従來の資本主義的經濟に徹底的な變革を加へ、勞働と資本との構成を従來の自由主義的或は階級支配的なものとせず、之を民族的立場から「全體主義的」に統制せねばならぬとのナチスの基本精神が生れたのであり、第二には之と共に獨逸民族の解放といふことが同時にユダヤ人排除といふ問題となつて現はれたものと解すべきであらう。

換言すれば、ナチスの民族觀は、ドイツ民族の急迫せる危機から生じたもので、その内容に於て、獨斷や民族的エゴイズムが認められるにも拘らず、極度の危機から自民族を救出して正常なる發展に向はしめる非常對策としては、或は止むを得なかつたであらうことが、推知されるのである。

尙ナチスの反猶政策が更に對內的に、自民族の團結を圖る手段として、資本主義、共產主義をユダヤ的なものとして排撃することにより、間接にドイツ人資本家及び共產主義者、特に社會主義者及び自由主義者の制禦又は彈壓に資し、對外的には、對ソ、英、米、佛等との外交問題に於て常に「ユダヤ的」なる烙印を用意して、相手國を攻撃する場合之を「ユダヤ的」と銘打つ反面に於て、巧みに相手國內親獨分子と握手する餘地を残さんとする特殊の意義を持つものであることも、この際看過してならぬ點であらう。

以上を要するに、現代反猶主義の第二の特色は、その本質に於ては第一の特色と共通するものでは

あるが、唯ドイツに於ける前記の如き特異の事情から「民族理論」なる新裝の下に一段と激烈なる形をとつて現はれた事にあると見るべきである。従つてその影響力も、本來からすればドイツ以外に對しては左程大ならざるべき筈なるにも拘らず、事實は之に反して世界的に反猶運動再擡頭の根源をなしてゐる所以は、ナチス・ドイツの積極的な對外宣傳にも因るが、他面國際情勢の緊迫化に伴ひ、諸國に民族主義的全體主義の機運が濃化し、ドイツ同様、ユダヤ民族擁護諸國の反猶感情を新たに刺戟しつゝある結果と考へられるのである。

三、所謂「プロトコール」の影響

最後に現代ユダヤ問題に就て指摘さるべき第三の特色としては、所謂「シオン賢者のプロトコール」なるものの出現に言及しなければならぬ。このプロトコールは一八九七年バーゼルで開かれた會議の報告書と言はれ、第一次世界大戰の末期頃ロシア語から各國語に翻譯され、廣く世の中に流布され始めたものである。その内容は、シオン賢者の頭領が、ユダヤ人とフリー・メーソンと共同して世界を崩壊せしめ、その跡にユダヤ人の世界帝國を建設せんとして、賢者達に授けた祕密計畫であり、その手段としては、諸國民を互ひに相争はせ、彼等を政治的にも經濟的にも道德的にも腐敗墮落させるといふのである。

興味あることは、ヒットラーの前記民族理論のユダヤ人觀中にも、少からず之に符合する諸點を發

見ることであるが、斯かる文書の出現が現代反猶主義に特殊の性格を附與し、之を或る程度觀念化する上に與つて力あつたことを否定出来ぬのである。といふのは、所謂「ユダヤ禍」の名の下に總稱されるユダヤ民族の種々の活動が、それが客觀的には他に相當の理由が認められる場合でも、往々にしてこのプロトコールによつて事實以上に誇張され、觀念化され、ユダヤ民族は世界征服を企圖する陰謀民族として「國際秘密力」「地底政府」「金權政治」等々といつた一大秘密計畫と組織とを有する魔力的存在にまで引上げられるに至つたのである。

プロトコールの眞偽に關しては種々議論の餘地の存するところであり、之を根據としてユダヤ問題を演繹的に觀察することは、勿論不可であらう。だが、プロトコールの内容と一九一四年以後各國に起つた事實との間に一脈の共通點が見出されるといふ事實が、而して又その傳統的な民族理想から觀て、一般ユダヤ人は兎も角、その指導層中（例せば世界猶太人同盟或はアナイ・プリスの如き）には實際に斯かる企圖を抱き、之が實現を期する者の存在し得るといふ事實が、陰謀民族恐るべしとの深刻な印象となつて、現代反猶思想の驚くべき普及の上に一役買つてゐることを知らなければならぬ。

第五章 ユダヤ問題對策の史的考察とその將來

第一節 今次大戦とユダヤ民族

ユダヤ人ルイス・ゴールディングはその著「猶太問題」(一九三八年)に於て、ユダヤ人の歴史始まつて以來、現在は中世にも勝つて最も深刻な時代である、と言つてゐる。そして彼は、その理由を中世の迫害と現存のそれとの間に於ける二つの重要な相違に求めるのである。

第一に中世の迫害は主として猶太教の信仰に因るものであり、改宗する者は之を免れたが、現在の對象は種族としてのユダヤ人であるから、彼等としては迫害を避ける方法がない。

第二に、過去の迫害に於ては、何れにか逃げ途が與へられた。パレスティンから追放された際には羅馬に收容される途があつたし、英國から追ひ出された時は佛國に逃げ込めた。佛國から追ひ出された時はドイツとスペインに逃げた。ドイツで虐待されればポーランドへ行つたし、スペインから追はれた時はトルコが、又ロシアにボグロムの行はれた時は合衆國が迎へてくれた。然るに、現

在は各植民地共人口過剰に悩んで居り、世界到る處が經濟恐慌に見舞はれてゐる。その上各國共に國民主義の風潮強く、凡ゆる逃げ途が閉ざされてゐる。即ち現在の世界は、不幸にもユダヤ人にとつては、住んで居られぬ國と入れない國とだけになつてしまつたのである、と。

ルイス・ゴールチングが此の言を爲したのは、戰爭勃發前の一昨々年のことである。然るにその翌年の秋、今次大戰の幕が切つて落されてから以來の中・東歐諸國ユダヤ人の運命に至つては、正に悲惨の一語に盡きる。米國に次で世界第二の猶太人口三百十餘萬を擁したポーランドは、獨ソ兩國の分割するところとなつたが、その結果一半は忽ちナチス排猶政策の犠牲となつて路頭にさまよひ、所によつては中世ゲットーの再現をさへ見ようとしてゐる。他の一半はソ聯の手に着々ソウェート化が進められて、昨日までの銀行家、商工企業家が今日は無一文のプロレタリアと化し、ポーランドの商人や職人の大部分を構成した中産階級以下のユダヤ人にしても、彼等の精神から一切の民族的なものを取上げようとするソウェート生活は堪へ難いものとなつてゐる。

更にドイツの鐵蹄下に屈服したフランスを、ベルギーを、オランダを見よう。此等の諸國に於ては民主主義と自由主義經濟の温床の上に巨大資本を擁して政治、經濟、社會の各方面に雄飛してゐたユダヤ勢力は、今や根柢から崩壊しようとしてゐる。アンシユルスと共に没落した墺國のロスチャイルド家、佛國の降伏に先立つて英國に逃亡した同國のロスチャイルド家以下のユダヤ富豪等々、正にその代表的な世紀の悲劇である。

一方、現に獨伊に對抗しつゝある英米兩國は如何。既に前段にも指摘した如く、現代的反猶思想が兩國内にも醗酵されつゝあつたことは事實である。併し兩國とユダヤ人との結合關係は一朝一夕に破れるやうなものではない。パレスチナ建國に關するバルフォア宣言を裏切つた英國ではあるが、パレスチナ・シオニスト代表部總理のワイズマン博士が對獨宣戰と同時に時の首相チェンバレンに對し、ユダヤ民族は大英帝國に味方してデモクラシー擁護のため戦ふ旨を聲明した事實、ナチス排猶政策の犠牲者たる無数の避難民に對して大統領以下の米國官民が常に積極的な救済に任じつゝある事實等は之を明かに立證するのである。

だが、この兩國の場合に就て見ても客觀的情勢はユダヤ民族にとつて必ずしも明朗たり得ない事情がある。と云ふのは、兩國共ユダヤ民族との關係は既に飽和點に達してゐて、進んで避難民を自國領内に收容する程の積極性を示し得ない立場にあると共に、英國委任統治下に行はれつゝあるパレスチナ建國にしても、同國の對アラビア人政策から支障百出の形であり、更に兩國に根を下して雄飛を試みようとするユダヤ資本も、民族主義や統制主義の時潮に押されて、果してその偉力を持續し得るか頗る疑問の状態に陥りつゝあるからである。

ユダヤ民族にとつて残されたホープ、英米の二國にして亦斯の如しである。併し英・米・ソ三國に既往のユダヤ人は一應別としても、残された約五―六百萬のもの運命は一體どうなるであらうか。彼等を壓迫しつゝある諸國に於て或は彼等が落ち行く先々の諸國に於て、ユダヤ問題は愈々激化し、

或は過去の執拗さを以て蒸し返されることがないであらうか。ユダヤ民族が現代反猶主義の突風にその地上から一掃されて了はぬ限り、人類社會はこの問題の未解決から尙多くの不幸を忍ばねばならぬであらうことを、歴史は我等に教へるのである。従つて之は一個のユダヤ民族のみの問題ではなく、之と關係を持つ凡ゆる國々の、又世界人類の問題でもある。茲に於て當然新たな問題が提起されねばならぬ。それはこの殆ど二千年に亙つて繰返されて來たユダヤ問題解決のために、如何なる對策が過去に於て試みられたか、そして現在及び將來に向つてそれは果して如何なるものであらねばならぬかといふことである。

第二節 過去に於けるユダヤ問題の諸對策

ユダヤ問題の歴史は要するにユダヤ人と一般西洋人との兩立、不融和、その根本的背反を立證するものであり、兩者の關係が殆ど宿命的な悲劇の連続であることは、之まで述べ來つたところにより、略推知し得るであらう。この難問題を解決せんとして、過去に於て幾多の對策が講ぜられたことは勿論であるが、併しその何れもが所期の効果を齎らし得なかつたところに、今日への問題の持越がある譯である。以下此等諸對策を幾つかの形式に分けて觀察することとする。

先づ第一の最も原始的な形式はユダヤ民族の絶滅政策であつた。之は古代に於ては埃及、バビロニ

ア、羅馬に於て、中世に下つてはイギリス、スペインに於て、更に近代ではロシアに於てユダヤ人の全滅を目的として、採用されたこともあれば、採用されんとしたことも屢々あつた。併し成功した實例は一つも無かつた許りか、寧ろ反對にユダヤ人の復讐心を刺戟し、將來に向つて問題激化の禍根をさへ残したのである。

第二の形式は隔離政策であつた。ユダヤ人の居住を一定の箇所又は地域に制限して、一般人との混淆を防ぎ、それによつてユダヤ人の統治に實效を期せんとした方法である。所謂「ユダヤ窟」(ゲット)や「ユダヤ人指定居住區域」は之に依つて生じたもので、前者の代表的なものはオランダのアムステルダム郊外のもの、ドイツのフランクフルトに於けるもの、ポーランド、ロシアのもので、後者はロシアに於てその實施を見たのである。

併し人間と人間との關係は、日本の鎖國時代の實例に鑑みても解る如く、絶対に外部との交通を遮斷する譯には行かぬ。人間の自然の膨脹から自然に發生する問題は、單に機械的に或は形式的に治めんとしても、效果の徹底を期することは出来ぬのであつて、ユダヤ問題にしてもこの隔離政策により解決されることは出来なかつた。

第三の形式は、改宗による同化融合政策である。即ちユダヤ人を基督教化することにより一般西洋人との不同化の原因を除去し、その旺盛な排他的民族主義を矯正して、所屬國家なり社會との渾然融合を計らんとしたものである。之も一箇の傾向として或は運動として相當の歴史を持つて居り、既に

述べた如く、特に十八世紀のユダヤ人解放以來一時目立つて行はれたところである。そして西歐諸國及び米國では實の處、ユダヤ人を着々同化することに成功した積りであるが、その幻滅觀は過ぐる歐洲大戰と共に經驗されるに至つた。即ちユダヤ人は依然として何れの國土に於ても同化されて居ないといふ事實が確證され、歐米諸國を通じて、明るみへ出された問題として騒がれてゐると否とに拘らず、一箇のユダヤ問題の依然たる存在を否定し得ぬ事が明かにされたのである。換言すれば、改宗による同化融合政策も亦ユダヤ問題を全的に解決し得る方法でないことを知らなければならぬ。

第四の形式は追放政策である。之を實行したものとては、歴史的に觀て古くはクロデウス時代の羅馬から、中世以降では英國を始めスペイン、ポルトガル等々を擧げ得べく、現代に於てはヒットラー治下の獨逸の方針として着々實行されてゐること周知の如くである。だが、この政策は現在のドイツに關する限りに於ては未知數としても、其他諸國に於ける過去の實績に徴する時は、必ずしも成功してゐない。一たびこの政策を採用した英國が三百年の後に再び之を歓迎した事實の如き、之を證據立てゝゐるのである。否それのみではない。この方法は一國內に於ける難問題を他國へ送り込むだけのことであつて、根本に於て無責任なものであり、問題の眞の解決に資する所以ではないのである。

第五の形式は獨立政策である。所謂「シオニズム」或は「シオン主義」と稱され、ユダヤ人自身の側から提案されてゐる解決形式であつて、古代ユダヤ民族の郷土たるパレスチナにユダヤ人の獨立國家を建設しようとするのがその内容である。思想としての「シオニズム」は頗る沿革に富んだもので

あるが、之を政治的に實行に移すことを目的としたものとしては、一八八二年に起原を求むべきテオドル・ヘルツルの運動が元祖だと認むべきであらう。そしてそれが第一次世界大戰のバルフォア宣言を契機として、英國委任統治下に實現の緒に就いたのである。

併し乍ら、現在のパレスチナは猫額大の小地域であつて、之へ全世界のユダヤ人を收容し盡すことは、勿論出來得ぬことである。又現在に於てさへ對アラビア人の問題がユダヤ人の建國活動をかなり阻害し居る時、如何にユダヤ人の財力と策略とを以てしても、この上パレスチナの地域を任意に擴張することは、凡そ至難事とせねばならない。とすれば、新ユダヤ國の建設もユダヤ民族の權威を増し、その勢力を助け、その格式を上げることに役立つといふ効果を或は齎らし得ても、肝心の問題解決に左程貢獻し得ないことを我々は現状から推斷せざるを得ないのである。

第二節 問題解決の將來

以上、ユダヤ問題解決のために遠い過去の時代から現代にかけて試みられ來つた數々の對策を一瞥して、我々の容易に看取し得ることは、此等諸對策の殆んど何れもが所期の成果を收め得なかつたこと、従つて本問題が如何に解決困難な問題であるかといふことである。斯様な難問題に對して、今俄にその新たなる解決策を提示し、或はその將來を豫想することは、無謀も甚だしいとせねばなるまい。

故に茲では、叙上の如き諸解決策の総合的な觀察と若干の新しい考察との基礎の上に、將來比較的可能視される解決の大體の方向なりとも豫測してみることにする。

先づ何よりも先に考へねばならぬのは、斯かる難問題は、各獨立した一つ一つの對策のみを以てしては、決して全的な解決を所期し得ぬことであらう。従つて筆者は、大體次の三方面から、時と場所との狀況に順應して、或は箇々に或は併行的に、その解決策が試みられる時に於てのみ、實効を期待し得るものであることを豫め指摘しなければならぬ。

第一に、ユダヤ民族は殆ど世界各國に分散寄住し居るが故に、本問題の解決には、關係諸國の國際的な協力を絶対に必要とせねばならない。そしてその協力の目標は、世界の何れかの地に一定の土地を開放して、彼等のために獨立又は自治の區域を設定し、諸種の事由から諸國に止まり得なくなつたユダヤ人を收容せしめることにある。

この意味に於て、近代ユダヤ民族の代表的思想とも云ふべきシオニズムがバルフォア宣言を契機とし大戦後平和會議の確認を得て具體化したユダヤ民族二千年の思慕の郷土パレスチナに於けるユダヤ國建設の如きは、對アラビア人問題の調整に協力して、速に初期の目的を達せしむべきものと考へられるのである。

又現にナチス・ドイツ其他の排猶政策開始以來、國外に避難する幾萬或は幾十萬のユダヤ人のために、米國大統領以下提唱の下に組織された三十二ヶ國より成る國際政府委員會を始め各種のユダヤ人

及び非ユダヤ人機關より新たなる收容可能地に關し調査及び折衝の鋭意行はれ居る事實も、同じ意味に於て、本問題解決に資し得るものとして注目されてよいであらう。

次にユダヤ問題解決のための第二の對策は、當然一國爲政者の立場よりするものであらねばなるまい。而してそれは、凡そ本問題を内藏する國々の政府當局として採るべき國內ユダヤ人に對する統治方法に求められるべきであらう。この場合、曾て試みられた絶滅政策の如き原始的な暴虐行爲や問題を他國に追込むに過ぎぬ無責任な追放政策は論外として、隔離政策や同化融合政策の如きは、依然としてユダヤ人對策の中心をなすべきものと豫想される。勿論隔離政策とは云ふものゝ、古代及び中世のゲットー式方法をその儘再現することは、現代の諸條件よりして不適當であり、且つ不可能でもあらう。併しユダヤ人と非ユダヤ人との摩擦を緩和する意味から云つて、そのアイデアは依然何等かの形に於て實現を見るものと考へられるのであつて、既に多數のユダヤ人口を擁し、多かれ少かれ本問題の激化を來しつゝある國や、或ひは早晚その可能性を豫想される國々としては、都市と農村とを問はず定住區域を指定して、彼等に或る程度の自治生活を許す如き、その最も實現可能な方法であることが豫想されるのである。而してソ聯邦のピロ・ビジャンに於けるユダヤ自治州設定の如きは、正に現代に於けるその最初の適例として擧げられ得るであらう。

隔離政策と並んで考へられるものに、前述の如く同化融合政策がある。改めて指摘するまでもなく、過去のそれは、ユダヤ人が基督教徒に改宗すれば容易に同化し、ユダヤ問題は自然解消するもの

と、基督教徒たる一般西洋人が思惟したこと因るものであつた。そして事實、彼等ユダヤ人は改宗と共に可成り同化し始めたのであるが、併しそれは自由主義や民主主義等の擡頭に基く十八世紀末からのユダヤ人解放と云ふ他の事實も、ものを言つてゐることを見逃してはならぬ。つまり改宗がユダヤ人をしてユダヤ教に基く排他的な民族意識を弱めたことと、解放が他民族への對抗意識を弱めた意味に於て、同化融合政策は或る程度の目的を達したとも見られ得たのである。併し一たび解放がユダヤ人に對する差別待遇を事實に於ては一掃し得ぬことが解り、更に彼等の進出による近代的諸對立が新たなる壓迫をユダヤ人に加ふるに至つた時、同化融合政策は破綻を來し、ユダヤ人は再びユダヤ民族として結束し、禍根を將來に向つて殘した。このことは、同化融合政策の實効を期するためには、單に改宗によるユダヤ教離脱以外に、彼等を平等に待遇して、非ユダヤ人側が彼等に對して人種的偏見を持たぬ様にする必要條件であることを、我々に示唆するのである。

換言すれば、ユダヤ問題解決の一策としての同化融合政策の核心は、第一にはユダヤ人をして偏狹な民族主義を出來得る限り離脱し環境に順應せしめることであり、第二には非ユダヤ人側をしてその人種的偏見を名實共に訂正せしめることである。そしてユダヤ人からその排他的な民族意識を除去せしめるためには、改宗によるユダヤ教離脱も歓迎すべきであらうが、之を強制することは不可能なるべきを以て、爲政者としては別に又方策を考へなければならぬ。即ちこの場合、ユダヤ教は彼等の純然たる信仰として之を認めるも、之が環境に順應せる進化を誘導すると共に、從來諸國の一部ユダヤ

人間に認めらるゝ如き凡そ宗教的、文化的或は其他の外観、色彩の下に集會の機會を提供し、その旺盛なる民族意識を必要以上に培養し、之を何等かの政治的活動にまで強化し得る底の諸組織や施設の存在及び特にそれ等の國際的連絡又は結合に對し再検討を加へ、之を統制する方途が採擇さるべきであらうと考へられる。

この關係に於て興味に値するものはソ聯邦であつて、同國はユダヤ人に對して何等民族としての差別待遇を與へず、人間として全く平等の地位を保證してゐる反面に於ては、斷乎として凡そ民族主義的色彩を帯びる諸活動を禁止してゐるのである。ユダヤ人の好むと好まざるとに拘らず、斯かる制度の下に於ては、如何に旺盛なる民族意識も時と共に弱まらざるを得ぬであらうことは、想像するに難くない。筆者は勿論茲でソ聯邦の對ユダヤ人策を推獎せんとするものではない。唯ユダヤ民族の同化融合政策に對する一つの示唆として、識者の注意を喚起せんとするに止まるのである。

最後はユダヤ人側自身に對して要望される解決策である。既に之まで幾回も繰返した如く、ユダヤ問題の内容をなすところのユダヤ人對非ユダヤ人の對立相剋の根本原因は、ユダヤ人が他民族と融合せずして常に同族とのみ集團生活を營む傾向を有することが第一であり、第二は寄生少數者としての彼等の進出が主として都市生活面に於て行はれる結果、人口比率を遙かに超躍して發展しつゝある恐るべき競争者として、多數者たる在來の民族から警戒排斥されることにある。とすれば、前者の場合、既に述べた如く、一國の爲政者として彼等の斯かる非融合的傾向を矯正する如き取締方針を採る

ことも必要であるが、ユダヤ人側としても亦その生活態度を改むる上に大いに努力を要望されること論を俟たぬであらう。又後者の場合に就て見れば、ユダヤ民族はその歴史的環境によつて古くから都市に集中生活し、商業其他都會的職業に偏して他民族の競争者として目立つに至つた許りでなく、更に中間搾取によつて他民族に寄生するものであるとの印象が、多分に反猶思想を培ふ結果となつてゐるに鑑み、ユダヤ問題解決のためには、ユダヤ人自身がなるべく分散的に各經濟部門に進出する如く努め、特に労働や農業方面に就業して、この偏倚的な地域的職業的分布の矯正を計る必要があるであらう。而してこの場合に於ても、一國爲政者の側より彼等の經濟生活調整のために或程度の統制と指導が要望されること勿論で、之なくして充分の効果は期待し難いと言はなければならぬ。

後篇 日本とユダヤ問題

第一章 東亞に於けるユダヤ人概況

前篇に於て筆者はユダヤ人とは如何なるものか、そのユダヤ人に隨伴するユダヤ問題とは如何なる原因によつて生起し、如何なる内容を以て發展して來たか、非ユダヤ人社會の之に對して採つた諸對策並にその將來の見透し等に關し、謂はばユダヤ問題の輪廓に就て、率直な敘述を試みた積りである。之は我日本とユダヤ問題との關係を明かにしようとする本篇にとつては、缺くべからざる基礎知識であり、その前提となるであらう。

ところで、本問題と日本との關係を究明する場合、間接的にはその及ぶ範圍極めて廣汎に互り得るのであるが、此處では現在我國が企圖しつゝある東亞共榮圈確立の及ぶ範圍を以てその地域的限界とし、その範圍内に於てなるべく直接關係ある諸問題のみを取上げることとする。順序として先づ前記東亞共榮圈內諸地域に於ける猶太人の概況を一瞥しよう。

第一節 日本に於けるユダヤ人

ユダヤ人が初めて日本に現はれた史上確實な記録はペルリ渡來直後の時代に屬する。即ち一八六〇年代の初頃、米國系ユダヤ人R・シヨイアーなる者が横濱に居住してゐて、「ジヤパン・エクスプレス」と云ふ日本最初の英字新聞を發行してゐたと傳へられる。

右に次いで、日本の開港直後エライアス・サッスーンが父デウイッド・サッスーンの商會の支店を横濱と長崎に開かうとして、始めて日本に渡來した。このデウイッド・サッスーンこそはバグダッドからボンベイに移住し、一族郎黨の協力により、十九世紀中に極東各地に自己の銀行・商會・倉庫等の網を張り繞らした男である。

始めてユダヤ人社會が日本に出來たのは、一八八〇年代長崎に於てであつて、彼等はロシア、アメリカ、イギリス等から渡來して、繁華な港町で商業を營み、當時著名であつたロシア系ユダヤ人金融家ギンズブルグの援助の下に、同地にユダヤ人専用墓地を設け、又猶太教會堂を新設した。かくて人口は十年許りの間に略百人を算するに至つて、英國系ユダヤ民會の支部や貧困同族の救濟機關さへも開設された程である。

然るに、其後長崎の繁榮が横濱と神戸に移るに及んで、同地のユダヤ人も次第に減少し、特に第一

次大戦後の不況襲來に際しては、残留するもの僅に數名に過ぎず、一九二四年には教會堂さへも賣却された。そして長崎に代り新たにユダヤ社會の出現したのが横濱であり、次いで神戸である。此等兩都市には英・米や近東諸國・印度等から來住し貿易に従事する者多く、相當の繁榮を見せた。就中横濱に於ては、ロシア系ユダヤ人にして戦争と革命とから逃れ來つて永久的に其處に落着く者、或は一時的に滞在する者が可なり多數に達した。米國ユダヤ人共同分配委員會の支部が此等避難民救済のため宿舎・食堂・圖書室・教會堂等を兼ね備へた建物を新築して活動したのも實に此頃のことである。かくて一九二六年、日本國內には約二千人のユダヤ人が居住したが、之が一時的滞在の避難民が引揚げるに従つて次第に減じ、一九三一年には五百人餘となつた。現在は其後多少増加して、世帯數約三百、人口千人内外と推定され、大體京濱地方（主として横濱）及び神戸に相半して居住してゐる。今之をユダヤ人の二大系統別（セファルジム及びアシケナジム）及び職業別に見れば、神戸では兩系統の數相半し、共に殆んど全部が貿易業に従事して居り、京濱方面に於ては國籍別等より判斷してアシケナジム系が過半を占め、職業的には外交關係官吏・教師・技術者等を若干含む外は、やはり貿易關係業務に従事する者が半數以上に達するものと見られる。

併し横濱と神戸と、現在いづれが在日ユダヤ人集中地として有力であるかと言へば、勿論神戸としなければならぬ。同市のユダヤ人は比較的最近になつて顯著な發達を遂げたもので、關東大震災による一部ユダヤ人の京濱よりの轉住、大阪方面を中心とする對外貿易の一大躍進に伴ふ外地ユダヤ人の

來住等がその主なる原因と目されるが、在日ユダヤ商社の實に七、八割までが現在同市に集中し、その數昭和十四年一月現在にて八十五社（組合加入のもの）を數へ、大部分は個人經營で、平均十二、三萬圓程度の僅少資本を以てかなり手廣い活動をなしつゝある。

尙在神ユダヤ人に就て特記すべきことは、近年ロシア系アシケナジム派の増加した結果、同派に屬する猶太人がセファルジム派より分離し、一昨昭和十四年春日本最初にして且唯一の猶太民會を組織し、民會所在の木造洋館内には更に禮拜堂・圖書室・食堂・娛樂室等を備へ、同族の團結を計つてゐることである。因みに同民會は哈爾濱を中心とする極東ユダヤ民族中央協議會の指令下に立つものである。

最後に在日ユダヤ人中には特に著名なもの又は財的に有力者と見做されるものは無いが、強ひて成功者を求むれば、横濱アイザック商會主シグモンド・アイザック、神戸イザック・アンタキ商會主其他二、三の者で、その資産いづれも百萬圓以上を以て目される。

第二節 滿洲國及び關東州に於けるユダヤ人

現在の滿洲國と關東州とを含む自然地理的意味に於ての所謂「滿洲」とユダヤ人との關係は、歴史の淺いにも拘らず、極めて深いものがある。それは帝政ロシア東漸勢力の一翼として滿洲開發に先鞭

をつけたものがユダヤ人であるときへ極言され得るからである。

滿洲にユダヤ人の入り込んで来たのは、實に帝政ロシア政府の東清鐵道（後の東支鐵道—北滿鐵道）建設當時からの事に屬する。帝政ロシア政府が鐵道建設に、滿洲の經濟開發にユダヤ人の才能を意識的に利用したことは明かであるが、ユダヤ人にしてみれば、彼等の權利を制限し、壓迫する法律の實施されて居らぬ新天地こそ、自由にして且つ安樂な生活が出来るに相違ないとの見透しをつけて、主として南露方面から最も企業心に富んだ者が多數哈爾濱指して乗り込んで来たのである。爾來ユダヤ人は殆んど間斷なく滿洲に來住したが、大體に於て次の如き時期を劃することが出来よう。

一、前述の如く鐵道建設着手に際し來滿した者の外、鐵道守備隊中に相當多くのユダヤ人が居り、それ等の大部分は除隊後も滿洲に止まつた。

二、日露戰爭に参加した露軍中のユダヤ兵にして滿洲に止まるものが少くなかつたと共に、當時ロシア本國に起つた革命騒動はユダヤ人に對してボグロム（掠奪及び虐殺）を誘發し、その結果迫害を逃れて來滿した者も多數あつた。かくて一九〇八年頃には北滿のユダヤ人數は既に六千人に達した。

三、第一次世界大戰に際し、戰爭への召集を免れるために徵兵適齡期のユダヤ人青年にして入滿する者が少くなかつたが、更に西部戰鬪區域から戰禍を避ける多數の者が入滿した。

四、一九一七年のロシア革命とそれに續く内亂は、ユダヤ人の入滿に拍車をかけ、その結果、一九

二二年頃には在滿ユダヤ人數は實に一萬一千人以上を以て算へられた。

叙上來滿ユダヤ人は主として北滿哈爾濱に定着し、殆んど終始一貫同地を本據に活動し來つたが、その初期時代に於ては、鐵道當局の後援を得て建設請負の仕事に着手し、ロシア人建設従業員や支那人苦力の供給に手を出し、次いで商業・金貸業等に進んで行つた。そして其の間露滿國境に於て密輸に従事し、娼家・賭博場・盛場等の經營も大部分彼等の手に行はれたのである。

日露戰爭に際し軍隊及び地方民に對する物資の有力な供給者となつて産をなしたユダヤ人は、次第に經濟的地盤を固め、彼等同族間の社會慈善團體・學校・圖書館・教會堂・新聞・職業組合・金融機關・其他公共施設が次々に開設された。そして彼等の經濟的勢力が他社會に對して如何に伸張してゐたかは、哈爾濱取引所委員會が彼等の提唱により成立し、第一期の理事會員中ユダヤ人の八名に對し他民族出身者五名に過ぎなかつたこと、取引所委員會議長が初代以來一貫してユダヤ人により占められたこと等によつても窺知し得るのである。

一九一七年のロシア革命を逃れて來滿したユダヤ人中には、資本を持つた者、其他インテリが多かつたため、新企業は更に起り、その社會・文化生活は頗る活氣を加へた感がある。だが、彼等が滿洲に於て最も華かなりし時代と言へば、ソウエート勢力が北滿浸潤を始めてからと見なければならぬ。即ち彼等の驚くべき順應性は巧みに之と結び付き、一九二二—二三三年頃その勢力は絶頂に達したのである。極東共和國駐滿代表ユダヤ人プムピャンスキイの策動其他により、東支鐵道が露亞銀行と

支那政府の共同管理に移つてからの彼等の活躍には、特に目覺しいものがあつた。露亞銀行が極東に於て猶太勢力の強い影響下にあつたことは、否定し得ぬ事實であるが、同銀行に於て指導的地位を占めてゐた者が殆んど例外なしにユダヤ人であつたこと、彼等がソ聯側と完全な連絡の下に活躍したことは、隠れもない事實と見られてゐる。

ソヴェート聯邦の對滿進出は、其後哈爾濱に純ソヴェート金融機關として例の極東銀行を開設（九二三年）したが、その幹部は閉鎖に至る迄終始ユダヤ人の占むるところであつた。續いて開設されたウスリー鐵道支社にしても、「ソヴェート商船隊」「國營保險部」「穀物輸出合同」等々の純ソヴェート機關にしても同然である。特に一九二四年、ソ聯は北京及び奉天兩協定により支那の承認を得、同時に指導的ユダヤ諸團體の積極的援助の下に友那側と對等の原則に於て東支鐵道の管理機關掌握に成功したが、初期に於ける同鐵道ソ聯側要職はやはりユダヤ人の掌中にあつた。加ふるに、哈爾濱に於ける初代ソ聯領事を始めその後繼者中に一再ならずユダヤ人が現はれたことは、モスクワが滿洲に於けるユダヤ人の勢力を考慮に入れ、之との緊密な連絡により對滿政策の萬全を期したことが窺はれるのである。

ソヴェート出先機關と在滿ユダヤ勢力との斯かる提携が、ソ聯自體の勢力滲透を助けたばかりでなく、著しくユダヤ人側を利したことは勿論で、一九二六年は滿洲のユダヤ系企業が最も華々しく繁榮し（穀物商、材木商其他の重要企業も多くは、彼等の掌中にあつた）、従つてその社會的勢力も絶頂に達した時代と見做すべきであらう。

一九二七年頃から在滿ユダヤ人の勢力衰退が始まる。同年露亞銀行其他の破産・閉鎖により受けた打撃、東支鐵道業態の悪化、一九二九年のソ支紛争、其後に於ける東支ソ聯側幹部の勢力減退等々がその主なる原因と見られ、その結果、在滿ユダヤ人は一九三一年に至つて五千人以下に減じたのである。

一九三一年の滿洲事變による情勢の變化は、ユダヤ人活動の衰退過程に拍車をかけ、爾來彼等は現在に至るまで全く偶然的性質の若干成功を部分的に収めただけに止まる。尤も晩年張政權から受けた強慾非道な壓迫と搾取は免れ得たにしても、彼等の最後の頼みの綱であつた東支鐵道が滿洲國側に賣却され、續いて新國家により實施されだした國民經濟統制政策は、ユダヤ人の得意とする商業的活動の特殊條件とかその獨特の技術を多分に抑制し、特にヨーロッパに勃發した新たな戦争の影響と國內統制經濟の強化は、彼等の曾ての役割を急速に清算しつゝあることを否めないものである。かくて滿洲事變以來何千と云ふユダヤ人が滿洲から主として米國・支那・ソ聯等へ去り、曾て一九二二年頃一萬一千にも達したものが現在僅かに三千三百を數へるに過ぎぬ事實は、この間の消息を最も雄辯に物語るものと言へよう。

以上に於て、在滿ユダヤ人が帝政ロシア東漸勢力の一翼として滿洲の經濟開發に先鞭をつけたものであること、帝政ロシア没落後はその驚くべき順應性によつて巧みにソヴェート政權と結び付き勢力

を増大したこと、その後滿洲に於けるソウェート勢力の退潮と滿洲事變後の重大な諸變化によつて彼等の地位が衰退の一途を辿りだしたこと等々を明かにしたが、併し茲に忘れてならぬ點は、彼等が假令逆境にある現在に於ても、その人口比例からすれば尙可なりの資金を擁し、滿洲國內外に亘つて粘り強い活動を續けてゐることである。特に彼等が國際性高く、財的に優位を占める在外同族との緊密な連絡に想到する時、その潜勢力は注目されなければならぬ。因みに、在滿ユダヤ人の經濟活動中目立つものは勿論商業であるが、就中毛皮商が全滿的に殆んど彼等の獨擅場に歸してゐることは、夙に周知の如くである。

在滿ユダヤ人に就て更に特記すべきことは、彼等が世界の何れに於ても然るが如く、滿洲に於ても常に同族間に緊密な連絡を保持することを忘れず、各主要地に民會（正確に言へば教團）を組織し、ユダヤ教を基調として團結し居ることであつて、哈爾濱に於けるものが最も整然たる組織を持ち、従つてその勢力も支配的である。此等各地の民會を統合するものが哈爾濱に本據を置く極東ユダヤ民族中央協議會で、それは日本及び支那に於ても極東在住ユダヤ人の八、九割を占むるアシケナジム系ユダヤ人を統轄すると共に、他方全世界の同族指導機關に結び付いてゐるのである。

次に在滿ユダヤ人中著名な者を挙げれば、第一に在哈ユダヤ病院長たるア・イ・カウフマン博士に指を屈しなければならぬ。彼は自他共に許す優れたる指導者として、極東に於けるアシケナジム系全ユダヤ人の衆望を擔ひ、前記中央協議會議長として八面六臂の活動をしてゐる。彼に次いで曾て

北滿の砂糖王を以て呼ばれ、現在八、九百萬の財を擁すると言はれる現北滿製糖副社長ツイックマンを始めとし、穆稜炭坑を經營するスキデリスキイ、主として貸家業を營むオークン、「モデルン」經營者カスベ等の百萬長者を挙げ得べく、特産輸出の「ドレイフス」「ガバルキン」兩商社、製菓及びレストラン經營のプレスレル（「ウィクトリア」經營）及びツィケルマン（「マルス」經營）、極東露字新聞界の覇者「ザリヤー」を經營するエ・エス・カウフマン等も世人の注目を惹くに足る存在であらう。

一、滿洲國及び關東州内人口

哈爾濱	二、八〇〇人
大連	一七〇人
奉天	一〇〇人
海拉爾	一三〇人
齊々哈爾	五〇人
其他	五〇人
計	三、三〇〇人

二、職業別(%)	
商業	四〇%

勤務人	三〇%
職人	一五%
自由職業	一〇%
其他	五%
三、國籍別(%)	
無國籍	七〇%
外國籍	三〇%
四、中・東歐よりの新來避難民數	
哈爾濱	一六〇人
其他	四〇人
計	二〇〇人

第三節 支那に於けるユダヤ人

東亞に於てユダヤ人と最も古く且つ深い關係を持つ國と言へば、それは正に支那である。即ちユダヤ人が初めて支那に現はれたのは千九百年も前のことで、當時彼等は小亞細亞から隊商路を通つて支

那に來たり、幾世紀もの間南京其他の中心都市に居住し、その間六世紀の山西省に於けるユダヤ教會堂の建立、九世紀廣東に於けるユダヤ人大虐殺、十二世紀中葉開封府に於ける大ユダヤ教會堂の建立等々は、史實として今に傳へられるところである。此等の事實に徴しても、支那に來住したユダヤ人が所々に彼等の社會を形作り、一時繁榮を續けたであらうことが容易に想像されるが、長年に互る同化と災厄の影響を受ける中に漸次消滅して、最近まで残つたものは、黄河沿岸開封府の支那化したユダヤ人のみとされる。而も彼等もその大部分は既に或は死に絶え或は上海に移住して、支那人大衆の中に没入して了つたのである。

近代に於ける支那とユダヤ人との關係は、實に十八世紀に入り西歐資本主義が支那に向つて市場開拓に積極的な進出を試みるに至つた頃に始まると見なければならぬ。即ち十八世紀初頭英國東印度會社が支那との間に通商取極に成功したに始まり、十九世紀に入つてからの阿片戦争から英清南京條約による南支五港の開港、香港割讓、治外法權の設定、之に續く同世紀中葉以降に於ける米・佛・露・獨等の進出による殆んど全支に互る樞要地の開放等々は、此等歐米諸國資本主義の先驅者として或は便乗者として、多くのユダヤ人を支那に送り込んだのである。

就中對支進出に先鞭をつけた英國、特に支那經濟の大動脈揚子江を扼する上海に牢固たる本據を据ゑた英國勢力の中樞をなすものが彼等ユダヤ人であつたことは既に著明な事實であつて、爾來彼等は香港・上海・天津・青島といった中心都市目がけて集中居住し、各出身國の勢威を背景に活動して、

一面本國勢力の伸張を援けたのである。

叙上の外、ユダヤ人の對支進出に就て特筆さるべき顯著な事實は、第一には、一九一七年のロシア革命とそれに續く内亂を契機として多數のユダヤ避難民が天津及び上海に入り込んだ事であり、第二には、ヒットラーの排猶政策實施以來中・東歐方面より主として上海に向つて夥しいユダヤ人が現に流入しつゝある事であらう。勿論彼等の大部分は新來者として而も無國籍者又は之に準ずる底のものとして、未だ微力な存在たるを免かれぬが、數的に見れば斷然在支ユダヤ人の大部分を占むるに至つた。従つて、彼等が國際的民族であり特異の社會を構成して所謂ユダヤ問題の因子たり得ることに想到すれば、その動向こそは支那の、延いては東亞の運命に相當の影響を齎らし得るものと見なければならぬ。

以下に於て、在支ユダヤ人の集中して居る主要諸都市に就て、少しくその概況を瞥見することとする。

一、北支諸都市に於けるユダヤ人概況

北支のユダヤ人と言へば、天津・北京・青島の三都市に集中居住してゐる。そのうち天津は斷然多く、現在人口約千八百、諸機關・團體其他社會諸施設も整備してゐるが、北京に於ては僅かに百名餘、従つて何等の團體施設も無く、社會的には天津の諸團體と合流して、京津一體の相を呈してゐる。

青島は北京に比して稍優ると雖も、居住者二百名を多く出でず、團體としては、民會を組織し居る外、目下教會堂の新設進行中であるに止まる。

北支ユダヤ人を系統別に見ればアシケナジム系に屬するものが大部分を占め、その中心をなすものがロシアから來住の無國籍者である。尙近年極東目指して押し寄せた獨逸其他よりの避難ユダヤ人は、當局の取締りもあり、滿洲同様餘り入り込んで居らぬ模様である。左に都市別にその概況を窺ふこととする。

1 天津概況

天津のユダヤ人は今世紀初頭百五十名内外を數へ、主にロシア、ポーランド等よりの來住者で、商人及びホテル經營者として活動してゐたが、漸次増加して、ロシア革命に際して多數避難民の流入もあり、最近のアメリカ版「ユダヤ年鑑」(第十四卷)によれば、一九三五年にその數三千五百人に達した。併し其の後支那事變起り、日本軍占據後は敵性分子の排撃と經濟統制の實施や國際關係の急變等のため減少を來し、一昨年末頃には民會登録者六百世帯、千八百名を算へる程度にまで減じた。今その國籍別及び職業別を示せば、次の如くである。

(4) 國籍別

無國籍(主として露系避難民)	八〇〇名
ソ聯籍	二五〇名

米 國 籍	二〇〇名
ド イ ツ 籍	一五〇名
英 國 籍	一〇〇名
其 他	三〇〇名
計	一、八〇〇名

(口)職業別、右の内、職業の判明せるものに就て分類すれば、次の如くである。

勤 務 人	二五〇名
毛皮取引商	一五〇名
ブローカー	一〇〇名
職 人(工人)	一〇〇名
自由 職業	七五名
商店、會社經營	五〇名

次に天津に於けるユダヤ人社會生活の樞軸をなす諸團體及び施設に就て述べれば、第一に居住ユダヤ人の統合機關としての天津ユダヤ民會を挙げなければならぬ。一九〇四年の創立にかゝり、現在家族を合せて七百名の會員を擁し、會長に無國籍ユダヤ人イ・ユ・レウインチンを、副會長に米國籍のジョー・モーリス、波蘭籍のエル・マリンスキイの兩名を載いてゐる。哈爾濱を本據とする極東ユダ

ヤ民族中央協議會の系統に屬し、その指令下にあることは言ふまでもない。

民會に次では、ユダヤ慈善協會・無國籍ユダヤ人事務局・亡命ユダヤ人對策委員會・其他小規模の金融組合やシオニズムを奉ずる諸團體があり、社會施設としては在住ユダヤ人社交の中心として社交俱樂部を有する外、教會堂、病院、初・中等學校等を擧げ得るであらう。

最後に彼等の經濟的勢力に關しては、天津に於ける銀行業・毛皮商・石油會社等の主なる資本家及び英佛租界を貫くビクトリア・ロードの巨商は殆んどユダヤ財閥の投資に依るものと言はれてゐる。

2 北京概況

北京に於けるユダヤ人口は一昨年八月現在約百二十名を算へられた。其の後幾分減少したと言はれるが、右の百二十名に就てその國籍別を見れば、佛國籍第一位を占めて四〇名、英國籍三〇名、米國籍及び無國籍各二〇名、ソ聯籍一〇名である。職業に關しては據るべき統計は無いが、概して資力あるもの多く、安易な生活を送つて居り、主として商業・接客業に従事し居る外、醫師・教師・其他の自由職業を營むものが多い。

尙真相は將來の調査に俟たねばならぬが、一部の報道によれば、同地の有名なロックフェラー醫院の首腦部醫師及び燕京大學外人教師中にユダヤ人が居つて有力な地位を占める外、表面佛人經營の北京飯店も實はユダヤ人の操縦するところであり、又外國大銀行及び商店の首腦部にも、相當入り込んでゐて、事變を契機として進出しつゝある日本人勢力を除けば、外國人間に於てはユダヤ人が實業界

の牛耳を執つてゐると傳へられる。

3 青島概況

青島居住のユダヤ人は最近の資料に據れば約二百二十名で、大部分は無国籍人に屬し、国籍所有者は四十六名に過ぎぬ。左にその国籍別及び職業別を示さう。

(1) 国籍別

無国籍(主として露系避難民)	一七三名
獨逸籍	二四名
英國籍	一二名
米国籍	七名
其他	五名
計	二二一名

(2) 職業別 右の内、職業の判明せるものを示せば、次の如くである。

キャバレー經營	六
貸家業	二
理髮業	二
醫師	二

事務所所有	二
洋服屋	一
樂器商	一

其他獨立生計者の大部分は俸給生活者である。

職業中特に注意を惹くのは、キャバレー經營者の多きことで、これは有數な避暑地として夏季同市に來遊する外人客の多きこと、英・米アジア艦隊の寄港地たること等に因るものと言はれ、相當の收益をあげてゐると傳へられる。

尙同地に於ても同族間の團結は鞏固であつて、民會を組織してユダヤ人權益の保護増進に任じ、又相互の扶助・親睦を計つてゐる。在哈極東ユダヤ民族中央協議會の指導下にあることは、アシケナジム系の斷然多いその構成から見ても當然であらう。會長は米国籍ユダヤ人ゲ・エ・ツェーベルマン、副會長は無国籍のドゥビンスキイ醫師で、兩者共同地の代表的ユダヤ人であるが、前者は多額の不動産を所有する百萬長者なるも、實權は後者の握るところと言はれる。

因みに彼等の精神的結合の源泉たる教會堂は、十數年に互る懸案を解決して、近く完成を見る運びになつてゐる。

二、上海に於けるユダヤ人概況

極東に於ける現代のユダヤ人を語るに當つて、何人と雖も上海を本據とする英國系猶太財閥の存在と活躍を見逃す譯に行かぬであらう。何となれば、上海こそは正に極東に築かれたユダヤ人の王國であり、所屬國家の國旗を背景にその勢力は時に支那を抑へ、その國際關係を左右する觀ありとするも過言でないのが、最近までの情勢だつたからである。

斯うした上海とユダヤ人との關係は、十九世紀半ばに起つた沒義道な阿片戰爭の結果、ユダヤ人ゴルドン將軍が上海を占據した時に始まつてゐる。即ち同將軍は當時の東印度會社から植民地經營の辣腕家たるユダヤ人を上海に呼び寄せ、國際都市上海の基礎工事を築いたのである。

最初に上海に根を下ろしたユダヤ財閥は、ボンベイに本店を有したバグダッド出身ユダヤ人デウィッド・サッスン商會主の子息エライアス・デウィッド・サッスンで、十九世紀半頃同商會の支店を設け、多數の一族郎黨を引き連れて來たのであるが、以來サッスン一族は次第に上海に勢力を築き上げ、在支ユダヤ勢力の中心となつて、遂には、財界は勿論、工部局・税關等上海の生命線、延いては支那の對外生命線を掌握して、現に當主ウィクター・サッスンの如き上海王を以て一般に呼ばれてゐることは、餘りにも著名である。

此際サッスン財閥の牙城を形作るウィクター・サッスン統率下のサッスン・バンキング・コーポレーションに一應觸れておくことは無意味であるまい。これは單に極東財閥たるのみならず、國際ユダヤ投資金融機關であつて、政治的にも亦目覺しい活動をなしてゐることは勿論である。本部は

倫敦にあつて、上海に於ては英・米・佛・獨・日等のユダヤ商會社・銀行等を組合員とし、親銀行には英蘭銀行と香港上海銀行を持つてゐる。事業は鐵道・交通・鑛山・牧畜・築港・土地賣買等あらゆる植民事業と、爲替賣買・金融保證等所謂財閥としてなすべき營利事業には、凡て手を出してゐるのである。

因みにウィクター・サッスンが個人として擁する資産は二億元程度と見られてゐるが、その支配下にある各種事業會社の總資本額は實に三十億元に達すると言はれ、以てその勢力の如何に絶大なるかを窺知し得るであらう。

サッスンの外、上海の財閥の屈指のものに、カドリ、エズラ、ハードン、アーノルド、ジョセフ、レヴィ、レモンド等々のユダヤ人諸家があり、彼等は上海或は香港を本據として、それ〴〵事業界に雄飛してゐることは言ふまでもない。更に上海名物ハイアラ、競馬場、ダンスホール、カフェー、映畫館等の享樂部にユダヤ人の溢れてゐることも周知の如くである。

かくて、上海はその建設當初よりユダヤ人の制覇の下に置かれ、今日同市がユダヤ王國を以て稱される所以も充分推察し得るが、更に同市が過去及び現在を通じて全支那の經濟的心臟部をなす事實に想到する時、支那に對するユダヤ人の關係の只ならざることを認めぬ譯に行かぬのである。宣なる哉叙上一連のユダヤ勢力が英國在支權益の一大支柱として、國際政治の上に如何に暗躍をなしたるか。今次支那事變の主要原因をなした英・米・佛の國民黨政府と提携しての日本排撃政策と言ひ、國

際聯盟を介しての大規模な對支再投資計畫と言ひ、將又リースロスによつて實現された幣制改革と言ひ、凡て此等の國際的重要事件に對して、彼等が現地出先勢力として直接間接に重大な役割を演じたことは否定し得ぬと共に、事變發生後と雖も未だその態度、志向に變化を來した事實を認め得ないのである。

次に上海に於けるユダヤ人の構成に就て一瞥を與へなければならぬ。

今次の事變前上海には七、八萬人の外國人が居住してゐたが、その大半は日本人（約三萬）及びロシア人（約二萬五千）によつて占められてゐた。その他には英國籍のもの約一萬、米國籍約五千、獨・佛人各二千人等がその主な構成分子であつた。此等外國人中猶太系外國人は四千人内外と推定され來つたが、數的にその大部分を占むる約三千數百人はアシケナジム系に屬し、革命當時のロシアからの亡命者及び北鐵接收當時の哈爾濱からの轉住者が主で、所謂無國籍者である。小賣商、小工場主、カフェー、レストラン等の經營者、醫師、音樂師、各種技術者等のユダヤ人の大部分は即ち此の系統に屬するもので、謂はば新來者としてその勢力も未だ言ふに足らぬ。之に反して、數に於てこそ僅々四、五百名に過ぎぬが、大上海建設に直接參加し、現に支配的勢力を壟斷しつゝあるユダヤ人はセファルジム系に屬し、概ね英國籍を有するものである。右の外、事變後上海には獨逸から避難して來たアシケナジム系ユダヤ人が現在までに約二萬人に達してゐるが、今此等を便宜上國籍別に分類すれば、次の如くである。

ロシア系無國籍ユダヤ人 約三、〇〇〇人

英國籍ユダヤ人 約五〇〇人

米國籍ユダヤ人 約五〇人

其 他 約四五〇人

獨逸避難ユダヤ人 約二〇、〇〇〇人

計 約二四、〇〇〇人

以上各系統別、國籍別に上海在住ユダヤ人の現勢を概観したが、他地と異なり、その構成及び勢力關係に於て錯雜を極めて居るが故に、此等を統合する諸機關・團體も比較的複雑であることは、蓋し免れ得ぬところであらう。左にその主要なるものを摘記することとする。

A、上海「セファルジム」派ユダヤ人協會（會長エドワード・ニシム）

英國籍アラビア系ユダヤ人を中心として組織する所謂民會であつて、在上海ユダヤ人團體としては、最も古き歴史を有する。會員數約五百名にして、連絡或は從屬機關として次の如きものが擧げられる。

イ、上海「アングロ・ジュイッシュ」協會（會長カドリー卿）

ロ、「マツカビン」俱樂部

ハ、「ベルツアハロン」ユダヤ教會

B、上海「アシケナジム」派ユダヤ人協會（會長トバーズ、名譽會長プロッフ）

アシケナジム系ユダヤ人（露系無國籍其他大陸系ユダヤ人）の團結と相互扶助を目的に組織せられ、在哈極東ユダヤ民族中央協議會の統轄に屬する。會員數三千數百を數へ、本協會の系統に屬する團體又は機關として、次の如きものがある。

イ、上海ユダヤ人俱樂部（會長プロッフ）

ロ、極東シオニスト・ツルムペリドル團

ハ、上海ユダヤ學校

ニ、無利子貸付組合

C、中歐猶太人自治協會（會長レオポルド・ステインハルト）

中歐方面より避難渡來せるユダヤ人相互間の親睦を圖り、文化、宗教及び厚生等に關する諸事業を行ふ自治的中心機關として、前記二ユダヤ人協會とは別箇に一昨年末結成されたもので、會員數は昨十五年二月現在にて約千七百名を數へた。

D、在支國際歐洲避難民政治委員會本部（委員長スビルマン）

國際歐洲避難民救濟委員會（在米）の支那に於ける本部であつて、在支ユダヤ避難民救濟を目的とする各種機關の指導並に連絡に任じてゐる。之に従屬又は連絡を有する在上海機關は次の如くである。

イ、上海歐洲ユダヤ避難民救濟聯合委員會（委員長M・スビルマン、第一部長コーマー、第二部長

マルクス博士）

ロ、ユダヤ避難民醫療協會

ハ、ユダヤ避難民收容所及び中央分配所

E、ユダヤ中央情報部（ヒツエム）極東支部（主任M・ビエルマン）

本機關は世界各地に散住するユダヤ人相互の連絡・通信をなす目的の下に設置され、米國に本部を置き、極東支部は從來哈爾濱にあつたものが、一九三九年上海に移されることとなつた。本機關はユダヤ人の生活並に移住就職等の調査・斡旋をなす關係上、當該地方の一般經濟状態は素より當該國の政治事情等をも調査・報告し合ふこととなつて居り、謂はばユダヤ人の秘密情報部たる性質を持つと言はれる。

F、ブナイ・ブリス協會（會長ラビン・ブラウン）

フリー・メイソンの外廓團體とも見做される一種の秘密結社の性質を有する機關で、アラビア系ユダヤ人を主要メンバーとし、表面シオン運動の一部たる「人類社會の健全なる發達に資すべき救濟事業を爲す」を目的とし、現に慈善事業として病院を經營しつゝある。

×

叙上の外オット・コリトシヨネルを團長とするシオン團、ダウイッド博士の主宰するユダヤ文化協會等も見逃し得ぬ存在であらう。

以上、上海に於けるユダヤ人を概観して附言せねばならぬ點は、大體同地には財的に絶對優位を占めるセファルジム系と數的に絶對多數を制するアシケナジム系とがあり、それに同じくアシケナジム系ではあるが全くの新來者である中歐避難民が加はつて、三つのグループが形成され、その各々が歴史的・言語的・宗教儀式的・國籍的諸相違から、必ずしも常に緊密な團結を保持するものとは思はれぬと云ふことである。併し同時に、同族の運命に共通した重大問題に關する限り、彼等の心奥に潜在するユダヤ教其他シオニズム等の中心思想により暗示される運命共同感が、一切を超越して結束の機運を作る原動力となり、それが中歐避難民に對する共同救援となり、ナチス獨逸に對する共通の深刻な敵意となつて現はれてゐる事實を看過してはならぬのである。

第四節 佛印及び蘭印に於けるユダヤ人

一、佛印概況

佛印に於けるユダヤ人は、現在海防、河内、西貢、トゥラーヌ等の諸都市に集中、居住して居り、米國ユダヤ年鑑によれば、その數約一千人と記され、土着歐米人（主として佛人）三萬人に對し三・三

%強に當る。前段支那の場合に徴しても明かなる如く、佛國帝國主義の佛印進出に便乘して渡來したものと察せられ、既にその勢力に相當強力なるもののあることは、近時新聞紙上に於て喧傳された次の事實によつても窺知し得られるであらう。

即ち佛印經濟界を牛耳る佛國實業家の一群中に於て、その中心的人物を求むれば、その一人に佛領印度支那銀行總支配人兼佛印爲替管理委員長として佛印の財政權を完全に掌握すると傳へられるユダヤ人がネーがあり、更に西貢商工會議所會頭としてユダヤ人アルダンの擧げられることである。特に前者は過去三十年餘佛印に在住する生粹のユダヤ人で、その實權は或意味に於て總督の政治的權力を凌駕するとさへ言はれ、以て在住ユダヤ人勢力の一斑を推測するに難くないのである。

尙昨十五年十月下旬の新聞電報は、佛印ドクア政權が反ベタン勢力の一翼としてユダヤ勢力の一掃を期し、同月二十三日河内市内外に活動中のユダヤ人祕密結社を始めとし、各地のユダヤ人結社に對し嚴重なる解散命令を發した旨を報じてゐる事實に徴すれば、彼等は佛印に於ても既に同族社會構成の據點としての各種團體・機關を持ち、緊密なる連繫の下に活動し居るものなることをも、容易に窺知し得るのである。

二、蘭印概況

蘭印に於けるユダヤ人の狀況に關しては、殆んど據るべき資料が無い。唯、資本的に同地の石油事

業に彼等が相當の勢力を持つてゐることは明かである。即ち蘭印の石油事業はバターフセ、コロニアル、蘭印石油三社の獨占事業となつて居り、その事業実績は一九三八年に於て、

バターフセ

四、二九二、七〇一施(五八・〇%)

コロニアル

一、九九〇、七六七施(二六・九%)

蘭印石油

一、一一四、三〇六施(一五・一%)

であるが、バターフセ會社は、「ロイヤル・ダッチ」會社と英系ユダヤ人富豪マークス・サミュエル家經營にかゝる「シエル・トランスポート・アンド・トレーディング」會社との合同に成る「ロイヤル・ダッチ・シエル聯合」の蘭印に於ける石油事業を管理するものであり、その背後には英國ロスチャイルド財閥が控へてゐる。

又蘭印石油會社は蘭印政府とバターフセ會社の折半出資になり、恐らく蘭印政府の出資は資源の現物出資と見られるから、資本的には又同一系統のものと云ひ得る。斯くて蘭印石油事業の大半はユダヤ系財閥の掌中にありと言ふも過言ではないのである。

右の外、曩に蘭印に使用して歸朝した小林前商相が、舊臘新聞記者に與へたインタビューに於て蘭印のユダヤ人に觸れ、次の如く言はれてゐる。即ち、

「今後の貿易はどうしても南方特に蘭印に重點を置かねばならぬ。しかも蘭印のみを相手とするのではない。蘭印の仲介として蘭印のユダヤ人を利用して、インド、アフリカ、濠洲、米國等との貿易を

盛んにすることを考へねばならぬ、云々」(東日、一五、一二、三〇)

右は商相の現地視察に基づく實感と見られるだけに、蘭印經濟特に商業、貿易方面に於て現にユダヤ人の占めつゝある地位の如何なるものであるかを、併せて我々に明示するものと言ふべきであらう。

第二章 日本に於けるユダヤ問題

第一節 初期に於ける我國のユダヤ問題

現在我國に於てユダヤ問題は漸く世人の注意を惹くに至つたが、併し問題そのものは敢へて今日に始まるといふ譯ではない。既に遠い過去の切支丹渡來の當時からその黒幕としてユダヤ人の活動のあつたこと、徳川時代和蘭通商によつてユダヤ商人のために莫大な金銀が日本から持ち去られたり、開國と共に押し寄せた歐米勢力の中にユダヤ人の積極的な活動の認められたこと等は、ユダヤ問題が實質的には日本にもあり得たことを證明する。唯當時歐米の内部事情に通じなかつた日本としては、之を問題として意識せずに終つたと見るべきであらう。

我國に本問題が始めて公然と紹介され、意識され、論議され出したのは、今から漸く二十年位前のことである。即ち一九一四年の第一次大戦が誘引となつて、同一七年ロシアに革命が勃發するや、同大戦も又革命も共にユダヤ人の陰謀であるとの説が一部に行はれ出し、それに例の有名な「シオン賢

者のプロトコール」なるものが流布され出したのと相俟つて、俄然我國にもユダヤ問題が登場するに至つたのである。今その経路を検するに、當時の浦鹽派遺軍に關係した軍人や軍屬其他がロシアの反過激派軍關係者を通じて得た「ユダヤ禍」に關する知識、特に露譯された「プロトコール」から受けた印象等が、其儘日本に持ち込まれ、紹介されたに始まるものと見られてゐる。

言ふまでもなく、第一次大戦にしても、ロシア革命にしても、其處には當然その生起を餘儀なからしめた諸般の複雑な原因があつて、ユダヤ人の策謀、暗躍に因るものとのみ斷じ去ることは早計であらう。併し右の歴史的・二大事件に於てユダヤ人が如何に有力な参加をなしたかは、數々の明白な事實の證明するところである。従つてユダヤ人の如何に警戒を要すべき存在であるかを、我國の一部識者が一應身近に感じたであらうことは當然と言はなければならぬ。

だが我國に於けるユダヤ問題登場の動機を、單に右の事實のみに限定し、この初期時代のユダヤ問題を舶來「ユダヤ禍論」の單なる受賣程度に片付けることは、適當でないであらう。と云ふのは、彼等ユダヤ論者は當時の我國思想界及び財界の歩みつゝあつた方向の中に、憂ふべきユダヤ禍の既に我國の足下に忍び寄りつゝあつた事實をも認めたからである。

抑々明治以來の我國思想界と言へば、殆んど西洋教學の直譯にしか過ぎなかつたことは、改めて指摘するまでもない。然るに、イギリスの功利主義及び立憲主義にしても、將又フランスの自由主義にしても、二千年來の流浪寄生生活から培はれたユダヤ人の傳統的な精神に相通するものであり、彼等

の積極的參加の下に生成發展を遂げたことは、史實の明示するところである。更に第一次大戦以來直輸入された民主主義、社會主義、共產主義、國際主義等々の諸思想にしても同断である。そして此等の影響を受けた我學界、思想界は果してどうであつたかと言ふに、それは究極に於て天皇機關説の出現さへも許し、我國體觀念の變質にまで發展したことは、周知の如くである。

一方當時の我國經濟界にしても、漸く國際經濟との繋がり濃くしつゝあつたが、斯かる事情は歐米財界に覇を稱ふるユダヤ國際金融資本の侵入と跳梁を許し、進んで我財界の死命を制するは勿論、前記思想的影響と相俟つて、一國の政治方針までも掣肘するに至るなきやを危惧せしめる事實的根拠が無かつたとは言へぬのである。

依之觀之、我國に於けるユダヤ問題は、當然登場すべくして登場したのであるが、併し當時の一般社會が之に對して極めて無關心であつたために、その所論も單なる好事家の好奇心を満足せしめる程度を出でなかつた。そして、それには次の如き諸理由が擧げられるのである。

一、ユダヤ問題は歐洲に發生したものであり、日本に於ては、前述の如く間接的な形をとつたものは兎に角、直接には問題らしきものの存在しなかつたために、この複雑な問題を感じする上に必要な何等の豫備知識が出來てゐなかつた。

二、ユダヤ人は皆英米其他民族の國籍を使用して、その國人の如きカムフラージュをなし、所屬國家を背景として行動する場合多きため、日本人には、その識別困難であり、従つて「ユダヤ禍」

による被害の正しい判斷がつかなかつた。

三、我國に於ける一部ユダヤ論者の問題取扱ひの方法が不手際を極め、ために世人の本問題に對する不信を昂めた。一例を示せば、彼等は一切の問題をユダヤ問題に結びつけようとし、そのため、往々にして見えすいたこじつけをやつたり、不合理な獨斷、偏狹な見解の押賣りをやる感を與へた如き、或は日本の直面せる切實なる諸問題に無關係な事實の羅列に終始する觀のあつた如き、即ちそれである。

四、多分にユダヤ色の浸潤した西歐思想の謂はば植民地と化した我學界、評論界が、右の如き一部ユダヤ論者の不用意な態度に乗じて、本問題の荒唐無稽を論斷し、世人の關心と眞面目な研究を阻止する上に大きな役割を演じた。當時斯うした諸思潮の雰圍氣をリードしてゐた吉野作造博士の所謂ユダヤ問題捏造説、ユダヤ禍迷妄論を携げての論難、攻撃は、未だ世人の記憶に新たなるところであらう。

以上を要するに、初期に於ける我國のユダヤ問題は假令一種の輸入ユダヤ禍論にスタートしたものであつたにしても、他面之を裏付ける若干の事實的根拠の上に立つものであつたことは明白である。唯その事實的根拠なるものが間接的のものであり、それに前述の如き諸事情が多分に作用して、ユダヤ問題に何等の理解を持たぬ一般人の注意を惹くに至らなかつたところに、問題の展開を見られなかつた主要な理由があつたやうに思はれる。かくて、我國朝野の本問題に對する斯かる無關心狀態は、

實に最近年迄続いたのである。

第二節 現代に於ける現實的諸問題

我國に於けるユダヤ問題が、種々の理由から一部研究家の手に任せ切りとなり、一般社會から置き忘れられた觀のあつたことは、近年に至り新たに數々のユダヤ問題に直面するに及んで、之が真相の正しき認識と適正なる對策の樹立に少からず困惑を來しつゝある事實の、重要な原因の一つをなすものと思はれる。

併しそれは兎も角として、今や我國人が欲すると欲せざるとに拘らず、ユダヤ問題は種々の意味に於て、東亞にとつても、日本にとつても、重要性を加へ來つたことを否むことが出来ない。而もそれは、從來間接的な問題に過ぎなかつたものが、現實の問題として直接我々の眼前に展開されるに至つたのである。

斯うした新しい意味に於てのユダヤ問題は、大體滿洲事變以降の我國の大陸進出や獨・伊の勃興を中心と捲き起された世界情勢の緊迫化等を契機として登場したものと見られ得るが、以下項を逐うて、少しくその問題の問題たる所以に就て、叙述を試みるであらう。

一、在滿ユダヤ人問題

滿洲事變の結果日本が滿洲を占據し、次いで我國と一體不可分、共存共榮を標榜する滿洲國の建國となるや、その勢力圏内には滿洲の草分けとも言ふべき數千のユダヤ人が現に居住して餘喘を保ち、國際的に種々の繋がりを持つ彼等の動向が、日滿兩國にとつて重要な關心事となつたことは當然と言はねばならぬ。今その理由を闡明するために、在滿ユダヤ人が過去に於て日滿側と如何なる關係にあつたかを述べることは、問題の核心を衝く上に徒爾ではあるまいと思ふ。

既に曩にも述べた如く、最初彼等は帝政ロシア勢力の一翼として、哈爾濱を本據に滿洲の開発に貢獻したが、一度革命起り新ソウェイト權力の滿洲進出となるや、巧みに之と順應、提携して、ソウェイト勢力の對滿浸潤を援け、自らも一九二五、六年頃に至つて繁榮の項點に達した。この時代の彼等は明かに新舊兩ロシアの出先勢力として日滿（或は日支）側に對して對立的な分子であつたことは當然である。

然るに其後に於ける滿洲よりのソウェイト勢力の退潮と張軍閥の權力増大は、著しく彼等の立場を不利にした。支那側官憲の彼等に對する目に餘る粗暴且掠奪的な行爲は募る一方で、その前途は正に暗澹たるものがあつた。これ彼等が滿洲事變勃發の當初、日本の大陸進出に共鳴し、特に日本軍の哈爾濱入城の際の如き、同市居住ユダヤ人の歴倒的な大多數が之を歓迎した所以でもあつたのである。

この頃の彼等は日本勢力に依存する事によつて、その前途に光明を見出さんとしたものである事は、容易に推測されたところである。

併し事變や滿洲建國を繞ぐつて捲き起された複雑な國際關係は、彼等の歸趨をも多岐ならしめた。多くの者は在米ユダヤ指導層の指令に動かされ、一部の者はソ聯側の走狗となつて密かに反日的言動に出で、かの聯盟調査團のリットン卿一行來滿の際の如き、現地ユダヤ人中に反日的資料や文書類を提供して之を援けたものがあつたと傳へられた如き、その一例である。併し大體に於て在滿ユダヤ人の當時の氣持は、一面に於て日本の滿洲進出に共鳴すると共に、他面深い繋りを持つ反日諸國の働きかけに會して困惑の状態に陥り、去就に迷つたと云ふのが真相に近いやうである。

だが、斯うした彼等の動搖に終止符を打つ新事態が発生した。それは民族協和を標榜する新生滿洲國に於てロシア・ファシスト黨の公然たる反猶運動がその機關紙を通じて行はれたことであり、更に時を同じうして哈爾濱に於ける富裕ユダヤ人に對し數々の迫害が繰返されたことである。此等一連の反猶行動に關しては、某國の使嗾によるものであり、滿洲國の聲譽を汚辱し、世界の反日輿論を喚起せんとして行はれた一種の謀略であると斷定する向もある程である。併しそれは兎も角として、これ以來在滿ユダヤ人の態度が急激に反日滿的となり、歐米諸國特に米國あたりの對日輿論を激成する上に、相當の役割を滿じたであらうことは、否定し得ない。

其後一九三五年頃に至り、在滿ユダヤ人の日滿側に對する態度には新しい傾向が認められた。

それは、緊密な國際的連絡によつて歐洲に新戰爭勃發の機運を早くも感知した彼等は、極東に於て日滿側との關係を調整し置く必要を痛感し、努めて之との接近を圖らうとするに至つたことである。之には勿論他面に於て、日滿側が漸次ユダヤ人に對する横暴行爲の取締を嚴にして行つた結果として、彼等の信頼を強めたことも與つて力あつたことは争はれぬ。そして一九三七年以來三回に亙り毎年未哈爾濱に開催された極東ユダヤ民族大會こそは、斯うした新傾向を如實に物語るものとして、指摘されてよいであらう。

同大會出席者は哈爾濱以下の滿洲國內諸都市、大連、神戸、天津、青島、上海等の居住ユダヤ人より選出された代表者であるが、彼等が第一回大會より一昨年末の第三回大會に至るまでの大會宣言及び決議に於て終始一貫して表明したところのものは、日滿兩國との共存共榮の立場より反共產主義を堅持すること、兩國の彼等に對する公正なる取扱ひを感謝すること、兩國を中心とする新秩序建設の大業に對し協力を誓ふこと等であつた。大會で採擇された此等の宣言や決議が、その都度指導的諸機關を通じて、全世界の同族に傳へられたことは勿論である。

近年、非常時經濟統制の強化が彼等の生業をも窮屈なものにし、それに日獨伊三國同盟の結果は、日滿兩國にも、排猶政策の實施を見るに非ずやとの危懼を抱かしめ、一部ユダヤ人の上海や米國への移住熱を煽り立て、その意味に於て彼等が一種の動搖状態に在ることは否めない。にも拘らず、前記の如き彼等の一般的親日滿傾向には左して變化が認められぬやうである。日滿當局としては彼等の斯

かる動搖を鎮め、右の望ましき傾向を益々助成・善導することが、民族協和をモットーとする滿洲建國の精神に鑑みても肝要であらう。

尤も在滿ユダヤ人は現在僅かに三千數百人に過ぎぬ。數から言つても、従つて又一般社會的にも、眞に微々たる存在でしかあり得ないと言へば一應それまでのことである。併し其處には確かにユダヤ問題に對する認識不足が隠されてゐる。一度我々が、彼等の滿洲との特殊關係や、極東ユダヤ人中に占める地位、歴史的なユダヤ人社會として持つ全世界特に米國ユダヤ社會との緊密なる連繫、彼等大部分の者の出身國たる現在のソ聯邦との微妙なる關係等に留意し、他方彼等が滿洲に於ける今日までの動向を回顧しつゝ更に將來のそれを豫想する時、それは決して渺たる存在でないことが痛感されるのである。従つて之を如何に指導し統御するか、彼等の向背の岐るゝところ——其處に如何なる影響が齎らされ得るかは、日滿兩國の内外政治に直接關係ある重要問題としなければならぬ。茲に在滿ユダヤ人を中心として、一箇のユダヤ問題が確かに存在する所以である。

二、在支外國籍ユダヤ人問題

茲に外國籍ユダヤ人と言ふも、問題の中核は主として上海を中心に蟠踞する英系ユダヤ財閥及び之を圍繞する一般外國籍ユダヤ資本勢力にあることは、勿論である。と云ふのは、此等一群の在支外國籍ユダヤ資本力こそ、現在諸國抗日の出先勢力として、蔣政權と協力し、我が東亞新秩序建設の現地

に於ける痛としての真相を露呈しつゝあるからである。

我國と在支ユダヤ財閥との關係を一箇のユダヤ問題として取上げるためには、一應順を逐うてその經緯を明かにしなければならぬ。併し茲では徒らに繁雜に陥るを避け、近道を探つて、ユダヤ財閥の對支再投資機運の擡頭から筆を起すこととする。上海を本據とするユダヤ財閥の對支投資事業が一應飽和状態に達したのは、大體一九三〇年頃からと見られ得るが、當時彼等が極東再投資の目標としたのは、資源に富む滿洲であつた。恰も好し事變後の滿洲は再建設期に入らんとして居り、一方ドイツの排猶運動に因る避難民收容地問題が起りかけてゐたので、在上海ユダヤ人有力者は滿洲開發投資といふ好餌をもつて、ドイツ避難ユダヤ人の滿洲移住計畫をも樹て、我方に對して猛運動を開始した。知日ユダヤ人名士故エブラの日本側に對する裏面的工作や英國ユダヤ協會本部の使者を派遣しての日滿官邊に對する表面工作等は執拗に繰返され、サッスーン以下のユダヤ財閥にして既に事業計畫を樹てたものも一、二に止まらなかつたと言はれる。

然るに、彼等の希望は日滿側の容るゝ所とならず、計畫は挫折した。而も當時滿洲に於ては不良ユダヤ人の檢擧や、ユダヤ人富豪襲撃事件、白系露人の反猶運動等起つてゐた際として、彼等は掌を返す如くに反目的となり、之を種々の行動に移すこととなつた。そしてそれは、大體二つの方向に分けて觀察することが出来る。

その一つは、多分にユダヤ勢力の影響下にあつた支那の英字・漢字新聞等の滿洲事變以來既に昂つ

てゐた反日氣勢を一層煽り立て、之を全支延いては歐米諸國に押し擴めると共に、他面資金的援助をなして、所謂抗日人民戦線の結成を援けたことである。

尤も斯うした事實は、單に在支ユダヤ勢力の仕業とのみ斷ずることは出来ぬ。寧ろ之は彼等所屬國家たる英米佛其の他の對支權益の確保及び増進のための日支離間策或は排日策と見るのが妥當かも知れぬが、併しそれは何よりも先に彼等ユダヤ人の利害に關係する限りに於て、進んで彼等がそのお先棒を擔いだと見做さるべきであらう。

他の一つは、支那國民黨政府を抱き込んでの強引な對支再投資計畫へのスタートである。當時反日機運の爆發點に達してゐた國民黨政府は、更にその首脳部が、米國で産をなし、ユダヤ國際金融家の支持を得てゐる大富豪の宋一家から娘を娶つてゐる蔣介石や孔祥熙、及び宋家の當主たる宋子文等で固められてゐた事によつて、右の計畫實施には誂へ向きの條件を提供したものであつた。

彼等はそれ〴〵本國政府を動かし、國際聯盟に對支技術合作調査委員會を作つて調査委員を支那に派遣し、他方英國駐支大使ヒューゲッセンの實地調査等も行はれ、それ等の調査報告を基礎に作り上げられたのが、上海を基點とする所謂中支横斷大鐵道建設十二ヶ年計畫で、沿線資源の開発をも含むものであつたことは勿論である。而して右計畫實施のための前提條件として行はれたものが、サッスーンの献策と宋子文の協力によつて斷行された英系ユダヤ人リースロス案による支那幣制改革であつたと見られ得るのである。

前記の歴大な對支再投資計畫が、ユダヤ國際財閥の積極的な働きかけによつて成立したものであることは、該投資計畫の實施に参加し權益の割當を受けたものが、英國系サッスン財閥は勿論のこととして、佛國のロチルド家及びドレイフユス商事團、ドイツのオットー・カーン會社、オットー・ウオルフ商會、米國のユダヤ金融トラスト等々であつたと傳へられることによつても、容易に判斷され得るであらう。

然るに豫期よりも早過ぎた支那事變の勃發と蔣政權の重慶遁竄は、右計畫の實現を水泡に歸せしめようとしてゐる。そして此場合に於ても、出先勢力としてのユダヤ財閥が利害を共にする各本國（但し獨は自國の排猶政策と對日接近によつて、又佛は獨への屈服によつて、この系列から離脱したと見るべきであらう。）との共同戦線から末だに離脱し切れなないでゐることは、周知の如くである。依之觀之、抗日戦線を結成する國際ユダヤ財閥の役割を検討することは、即ち援蔣諸國外交政策の根幹を衝くものであつて、この事は、援蔣諸國の手を封ずる上の重要な一つの手段は、支那を中心に現に活躍しつゝある敵性ユダヤ財閥の手を封ずるといふ點にあることを意味する。斯かる手段の如何なる形式と内容を具備すべきものであるかは、一般ユダヤ問題、特に國際ユダヤ財閥に關する正確なる知識を基礎として決定さるべきであることは、論を俟たぬが、要するに、我々は東亞新秩序建設途上在外國籍ユダヤ財閥を中心として、重大なユダヤ問題に當面してゐることを、ハッキリと意識せねばならぬ譯である。

三、新來ユダヤ避難民問題

一九三八年ドイツに於てナチス政権の排猶政策が強化せられ、續いて獨逸合邦やチェッコ、ポーランドの壊滅と此等諸國に於ける排猶政策の實施は、歐大陸におけるユダヤ人の地盤を根底から揺がして、無数の避難民を國外に送り出した。そしてその間途を東にとつて極東方面に流れ込む者の數も夥しいものであつた。その内滿洲及び北支方面は逸早く制限措置に出でたため、主として入國制限の無かつた上海に向つて殺到し、一九三八年九月イタリイ汽船によつて二百名の團體が渡來したのを始めに、同年末までには早くも千五百名に達し、翌三十九年中には更に一萬二千名の上陸を見た。同年八月、此等避難民の際限なき流入に狼狽した現地諸官憲は、相互折衝の上一定の入市制限を行ふこととなり、その結果幾分渡來數は減少したものゝ、増加趨勢は依然として續き、昨年五月頃には一萬八千人、現在總數約二萬（一説では二萬三千乃至二萬五千と稱される）に達する避難民が上海に氾濫してゐるのである。

今此等避難民の渡來狀況を觀るに、その大部分は獨逸よりするもので、出國に當り現金十マーク以上の所持を禁止せられあるが故に、一部の者を除く外は文字通り無一文、無資産で上海に到着した。到着後の彼等は現地に既設の歐洲避難ユダヤ人國際救濟委員會や新設の上海歐洲避難ユダヤ人救濟聯合委員會、さては現地ユダヤ人有力者等の斡旋を得て、サッスン系所有の共同租界蘇州路エムバン

クメント・アパートや博物院路ユダヤ協會、次いで華德路支那人小學校、涯山路外人小學校、兆豐里ブロードウェイ滙豐銀行虹口支店等に急設の合宿所に收容され、其後に於ては滙山、楊樹浦方面に家屋若しくは空を借入れ、分宿する者も次第に増加の形勢にある。

何故避難ユダヤ人が外人の多く住む佛租界及び共同租界西部方面に赴かず、我軍の占據地帯なる所謂虹口以北一帯に蟠踞するに至つたかと言へば、此の方面は支那事變にて居住支那人が避難し未だ復歸充分ならず、空屋の多かつたことと、前掲學校が休校中なりし事情等に因るものと見られる。かくて一昨年前記入市制限の實施當時、既に日本側に居住登録をなした者のみで約九千人に達し、越えて昨年五月頃の避難民數一萬八千人中その六割強までが楊樹浦に集中すると云ふ驚くべき事態を見るに至つたのである。

次に此等一般避難民に對する救濟狀況如何と云ふに、昨年八月頃の統計によれば約七、八千名のものが合宿所に收容されて給食を受ける外、一般には就職の斡旋、醫療救濟、開業資金無利子貸付部の融資による開業援助等が、救濟諸機關によつて行はれてゐる。因みに、渡來ユダヤ人の職業別を見るに、一昨年救濟委員會に爲した三千餘名の職業登録によれば、商業關係者が斷然首位を占め、有技術者が之に次いでゐる。此等の中、救濟機關の斡旋により就業し得たものは、同年十一月現在にて千二百餘名に達したが、内、商業關係が同じく首位を占めて五四六件、工業關係三五一件、醫業關係一六七件であつた。

以上述ぶるところの避難民救済には多額の費用を要したこと勿論であるが、ザリヤー紙(一五・九・一六) 其他に據れば、之がために收納した寄附金額は一九三八年十月以降昨四〇年七月末迄の間に約三百七十萬元に達し、其他別途の支出を加ふれば優に四百萬元を超ゆるものがある。右寄附金収容額三百七十萬元の中、約二十六萬元は現地を集められ、残る三百四十萬元は外貨で受領されたものであるが、外國側寄附の主なるものは、紐育のアメリカ・ユダヤ共同分配委員会よりの約五十五萬米弗、英國の二萬三千餘磅等である。

中歐ユダヤ避難民の上海渡來狀況を概観すれば、實に右の如くである。斯かる事實から東亞に於て如何なる問題が新たに生じつゝあるかを、次に觀察しなければならぬ。以下その重なるものに就て若干の説明を加へるであらう。

先づ順序として現に當面しつゝある問題を挙げれば、その第一は、彼等避難民の救済費には自から限度があり、彼等の救済が意の儘に行はれ得ぬ結果は、無爲徒食者を街上に氾濫せしめ、一個の社會問題を生ぜしめてゐることである。地元ユダヤ人が救済費捻出に最近悲鳴を擧げだしたことは周知の如くであるが、救済費の大部分を賄つて來た外國側からする寄附金にしても、今次大戰の影響を受けて著しく減少の傾向にあり、特に在米救済機關からのそれは、最近杜絶勝ちであるときへ傳へられる。とすれば、彼等避難民の過半は文字通り路頭に迷ふこととなる、治安上から言つても由々しき事態とならねばならぬ。況や渡來避難民の中には革命運動常習犯、共產主義者等も相當に居ると傳へられるに於てをや。

更に彼等避難民の職業戦線への進出は、假令それが緩慢なるテムボを以て行はれつゝあるにせよ、一部先住のユダヤ人や二萬數千を數ふる白系露人の大部分に對し、生活上の安定を脅かす悪材料となつてゐることも否定し得ないのである。

上海には既に事變による數十萬の支那人難民もあり、斯かる事態は事變後の現状處理に當る我方にとつて、何等かの應急的措置を必要とするものなることは言ふまでも無いであらう。

次は渡來避難民を繞つての將來に關する問題である。左に項を逐うて、之を觀察しよう。

一、事實の明示する如く、由來ユダヤ人は傳統的に混亂に乗じて地歩を固むることに妙を得てゐる。現在事變進行中であり、現状處理の充分ならざる際に、支那經濟の心臟部——而も外人活動の餘地の極めて自由且つ廣範圍なる上海に彼等が次第に定着すると云ふことは、必ずや將來同地を中心として東亞の異分子による一大勢力の出現を許すこととならざるを保し難い。この事は、從來も上海がユダヤ金權を中心とする歐米資本力の策源地であつただけに、一層の可能性を加へるものと見るべきである。そしてその結果は歐米勢力の再強化を來し、その全支に及ぼす影響、日支人に與ふる脅威の僅少なからざることを覺悟しなければならぬ。

二、前述の如く、ユダヤ避難民の過半は在留邦人の居住する所謂虹口以北一帶に蟠踞し、彼等の集團が所々に群生しつゝあるが、此等の地域は皇軍の聖戰による占據地帯で、謂はば我居留民の樂天地

たるべき地である。にも拘らず、彼等ユダヤ人の此の方面への流入は、今後定着の曉に於て此等一帯の地域をユダヤ人の居住地と化する可能性が多分にある。尤も現在までのところ、未だ影響の見るべきものは無いが、將來彼等独自の國際的互助連絡、商才等によつて邦人權益を侵蝕することなしとは、斷じて言ひ得ないのである。

三、最後に、現在上海に避難し來れるユダヤ人の大部分は、獨塊特にドイツよりするものであるが、その國籍關係を觀るに、彼等は *Law* の頭文字たる J の赤字を捺し、他のドイツ人と區別されたる旅券を所持してゐる。併しドイツ側官邊の言分としては、彼等は B 級の國民ではあるが、ドイツ國民として他の第三國人同様の公平なる取扱ひを求めてゐると傳へられる。一方避難民自身にしても、故國としてドイツの國土を思慕するものその大部分を占め、彼等はナチス政策の犠牲として出國はしたものの、將來ナチス政權の没落又は政策の緩和を期待してゐる。若し彼等の斯かる期待にして實現の場合、彼等は名實共に再び立派なドイツ國民となり、本國の外交保護權が極東に向つて發動の機會を得ることとなりはしないか。そして此の事は、結果に於てドイツの巧妙なる植民政策に引つかつたことを意味するものではないだらうか。

以上を要するに、上海避難民を繞る現在及び將來の諸問題は、東亞建設途上の我國に向つて、現状の慎重なる検討と適切果敢なる措置の必要なることを示唆するものと言つて差支へない。そして此の場合、歐洲に於ける戰禍の擴大とドイツの勢の伸張とが愈々避難民を増加し、世界の諸國も彼等の入

國を好まざる事實と相俟つて、その東亞への流入が今後も執拗に續けられるであらうことは豫期しなければならぬ。そして此等避難民に對する我方の對策の一つ一つが、同時に對外的にも極めて微妙なる反響を呼び起し得べきことを充分に銘記し、善處するの要あることは勿論であらう。

第三章 ユダヤ問題對策の日本的基調

第一節 ユダヤ問題對策の根本基調

一、根本基調としての皇道精神

以上に於て筆者は、我國が現に國內は勿論滿支其他東亞共榮圈内地域に於て、國內的にも國際的にも輕視すべからざる潛勢力を持つ一個のユダヤ民族と接觸を持ち、そこから生起する或は生起するであらう種々のユダヤ問題に當面してゐることを、極めて概括的に述べた。

次は之に對する我國として採らるべき對策に移らねばならぬ順序であるが、問題そのものの關係するところが廣汎であるだけに、充分なる豫備知識に基いて、時と場合に應じ、それ／＼適宜決定さるべきであることは、論を俟たない。特に前篇第五章第三節「問題解決の將來」中に於て筆者の觸れたところは、問題の本質に對應した一般對策の方向として、我國の條件下に於ても考慮さるべきもので

あることは、言ふまでもない。

併し乍ら本問題に對しての根本基調或は態度に關しては、其處に自ら歐米諸國と趣を異にした日本的なもの、我々大和民族としての独自の創造的見解が與へられなくてはならぬ。

然らば日本独自の根本基調或は態度とは何か。それは世界に誇るべき我が傳統の皇道精神を以て之に當ると云ふことに竭きるのである。この皇道精神によつて彼等を掌握指導するのである。

抑々大和民族は肇國の古から、之に歸順する民族を愛撫扶育し、決して之を虐遇討滅などのことを爲さなかつた。天孫人種を基幹として、如何なる他民族、外來民族をも包容し、之と和協同化し、未だ曾て其間に民族的嫉視・反目を爲すが如きことの見られなかつたことは、史實の證明するところである。而してこの事は取りも直さず我が肇國の精神たる八紘一字の大理想を精髓とする皇道の顯現に外ならない。

日本の亞細亞大陸進出は遂に滿洲帝國の創建を見るに至つたが、その建國精神たる王道にしても、我が皇道的一端が滿洲に於て發揚されたものと見るべきであらう。即ち大同元年三月一日の同國建國宣言の中に「凡ソ新國家領土内ニ在リテ居住スルモノハ、皆種族ノ岐視、尊卑ノ分別ナシ。(中略)王道主義ヲ實行シ、必ズ境内一切ノ民族ヲシテ、熙々皞々トシテ春臺ニ登ルガ如クナラシメ」云々と宣べられ、王道政治窮極の目的を道義世界の建設に置いて、現に民族協和、宣德達情の實際政治を爲してゐることは、之を證明するのである。

更に我國が支那事變を契機として、東亞新秩序の建設に堂々の歩武を進めつゝあるのも、詮じ詰めれば、均しく肇國の理想を東亞の天地に實現せんとするものである。この事は、我が當局屢次の聲明にも明かな如く、東亞共榮圈確立の主眼目が、居住各民族をして各々その所を得しむるを以て、主要なる一條件としてゐることによつても、推知し得るであらう。

我が皇道精神とは、實に斯くの如きものである。従つて現に東亞の地に居住し、或は之に安住の地を求めて渡來しつゝある一民族——ユダヤ人に對しても、根本に於ては、此間何等の差別待遇を爲すべきではないであらう。況や前段述ぶるが如き歐米諸思想の浸潤其他による間接的影響を除けば、我國としては歐米諸國と異なり過去に於て直接ユダヤ民族に對し怨恨を抱くべき何ものもないに於てをや。否、そのみではない。曾て日露戦争に際し、米國籍ユダヤ人富豪のヤコフ・シッフが日本に對する同情と帝政ロシアのユダヤ人迫害に對する憤激の念から、未だ勝敗の數全く不明なる開戦當初に於て、日本に對する金融的援助の先鞭をつけて日本を支援したこと、日本の對外通商に於て相手國商人にユダヤ人多く、我國貿易上に重要地位を占めてゐること、更に我國に居住するユダヤ貿易商中には、近東・アフリカ方面等の外國商社又は日本人商社が開拓し得ざる市場を進んで開拓し、以て日本商品の海外進出に貢献したものの少くないこと等々は、却つて我國として彼等ユダヤ人に負ふところあるを示すのである。

之を要するに、我國としては個々の問題に就ては、充分ユダヤ人を知り、過去のユダヤ問題の真相

を把握し、前轍を究めたる上に於て之に對處することは絶対に必要ではある。併しその根本的態度・方針としては、前述の皇道精神に據るべきであつて、苟且にも西洋流の反猶的な先入觀に捉はれ、之が處理に當る如き態度は避けなければならぬ。

次に、我國のユダヤ問題に對しての斯かる根本的態度が、實際的にも我が肇國の理想を發揚する上に重要意義あることを、看過してはなるまい。

日本が現在東亞新秩序を建設するに當り、武力のみによつて之が解決を期することの至難なるは言ふまでもない。全面的且つ根本的解決のためには、どうしても東亞に定住する諸民族の民心を把握しなければならぬ。それには右の皇道精神を忠實に實踐することによつて、先づ彼等をして、日本帝國は眞に信賴するに足る國家であり、大和民族の指導者として仰ぐに最も適はしき民族であることを知らしめなければならぬのである。

而してこの事は、ユダヤ民族に對しても同然と言へるであらう。と言ふのは、東亞に於ける彼等は、人口こそ正に九牛の一毛に過ぎぬが、併し彼等の中には支那に偉大な勢力を築いた世界的諸財閥が居る外、彼等自身英米其他諸國の政界・財界・言論界に抜くべからざる潜勢力を持つ世界ユダヤ民族の緊密なる一環をなすものであつて、その日本或は東亞に關する動向こそは、國際的にも亦決して小ならざる影響を齎らし得るからである。これは米國に對する場合に於て特に強調されねばなるまい。

彼等を掌握指導し、我方に協力せしめること、それは諸他の異民族に關する場合と同様、事變の處
理と東亞再建の重大責務に任ずる我國策の指導方針たるべきであらう。

二、皇道を基調とする諸對策要領

ユダヤ問題對策の根本基調に就て考察を試みた我々は、我國の現に當面する諸問題に對して、それ
が具體的にはどんな方向に於て具現されねばならぬかを、進んで検討しなければならぬまい。前章に於
て列擧したところの現實的諸問題に就て、以下に少しく之を觀察することとする。

但し此場合に於ても、前篇第五章第三節「問題解決の將來」中に述べた一般的諸對策が併行的に考
慮され、問題發生の諸原因の除去解決策が同時に試みらるべきであることは言ふまでもない。

(一)、先づ在滿ユダヤ人及び其他在哈極東ユダヤ民族中央協議會の傘下に在る在日・在支ユダヤ人の
大部分を占めるアシケナジム系ユダヤ人約一萬（大部分無國籍者であるが、外國籍を有する者でも動向に
於て殆ど區別無し）に關する對策の要領に就て述べよう。

既に指摘した如く、彼等が過去三回に亙る極東大會に於て表明したところは、日滿兩國の公正なる
取扱ひに對する感謝、防共並に新秩序建設への協力等で、趣旨に於て完全に日滿兩國の政策を支持し、
兩國に信頼し、その庇護の下に安居樂業せんとの希望を表明したものであつた。

斯かる事實は、彼等の過去に於ける動向からすれば、正に百八十度の轉換とも言ふべきであるが、

併し現實に日滿兩國の直接治下にあつて、或は兩國の施政を間近かに見聞して、その一視同仁的な皇
道或は王道政治の眞髓に觸れ得た者としては、當然の歸趨と言ふべきであらう。相手が二千年の流浪
生活によつて鍊磨されたユダヤ民族であつてみれば、之が過大評價は勿論堅く警めねばならぬ。併し
日滿側としては斯かる傾向を益々増進せしむべきであつて、それには傳統的に彼等の最も敏感な民族
的差別待遇を絶對に避け、苟且にも不要・不用意なる此種言動によつて彼等を刺戟し、我に離反せし
め、皇道乃至王道政治の眞價を傷けぬ様心すべきであらう。

(二)、次は外國籍を有するセファルジム系在支ユダヤ人に關する對策の要領如何である。

彼等はその數から言へば極めて僅少で、その唯一の集中地と認むべき上海に於てさへ數百名を算へ
るに過ぎぬことは、既に述べた。併し彼等が經濟的に或は更に政治的にも偉大なる勢力を有し、その
動向が東亞再建の上に大きな影響を持つことは否定出來ない。現に英系サッスン財閥を始め、其他
外國籍ユダヤ財閥が、之まで各所屬本國の出先勢力を代表し、如何に我國と對立を續けて來たかは、
周知の如くである。

斯かる状態を今後も持續することが、我國の東亞共榮圈確立の上に悪影響を及ぼすことは、自明の
理である。従つてその因つて來る原因を究め、之を除去せねばならぬ譯であるが、それには彼等の對
日認識の不足を以て最たる理由とし、之が是正を急務とするのである。即ち彼等は、日本の對支進出
を以て歐米流の帝國主義と感じ、其處に自己の權益に對する脅威を見た。而も本國と歩調を共にし之

と抗争するに當つて、彼等を指導した考は、日本の無力と云ふことであつた。今日と雖も彼等が斯かる考を是正したとは未だ思はれぬが、併し日滿同族や新來避難民に對する態度を通して示された日本の皇道精神や、今次事變に於て示された日本の實力が、漸次之に向つて彼等を引摺りつゝあることは、否定出來ぬ様である。

昨春サツストーンが渡米の際、新聞記者との會見に於て反日的言辭を弄したと傳へられるや、セファルジム系ユダヤ人有力者及び機關が我方に向つて諒解を求めたり、對日感謝の親日的聲明を發した事實の如きは、未だ曾て見られなかつた外國籍ユダヤ人の對日一大轉換として注目されてよいのである。

事實、外國籍を有してはるるが、既に土着資本家・事業家として永年現地に定住する彼等としては、現在では、日本に頼らねばならぬことを意識しだしてゐることは争はれない。英國貴族たるサツストーンの如き、面目上斯かる態度の轉換を表向き爲し得ぬものでも、肚では既に日本が彼等の在支權益を保護するに於ては開發資金援助もすべく、然らざれば投資を賣渡すと云ふ所まで、軟化してゐるやに傳へられるのである。

依之觀之、日本としては一層彼等に對してその誤解の掃と認識の徹底を期し、直接その治下乃至勢力下に居るユダヤ人を介して、日本の公正なる民族政策を知らしめると共に、彼等の權益に關しても、東亞新秩序の建設に背馳せず之に協力するに於ては、充分之を保護するものであることを覺らしむべきであらう。この事は、第三國特に英國の對支勢力からその中樞勢力を離脱せしめることを意味

し、延いては我國の事變處理と東亞新秩序建設上最も主要なる障礙の一つを取り除くこととなるのである。

曰、最後に、新來の中歐避難民問題に就て言へば、我國としては盟邦獨伊が追放するものをその勢力圏に收容することの面白からざることは、一應首肯し得る。

併し乍ら獨伊にはそれ相當の理由があつて彼等を追出したにしても、日本としては一應彼等に對し白紙たるべきであつて、西洋式反猶思想の受賣的な排撃は不可としなければならぬ。否、寧ろ事情の許す限り之に人道的態度を示すことが、八紘一字の皇道精神に立脚する道義日本の本領を發揮する所以であつて、此點毫も縮盟國なるの故を以て、獨伊に考慮すべき筋合ではない。

されば大量避難民の極東流入の開始された當初、我が政府當局が「彼等をユダヤ人なるの故を以て差別待遇をなさず、第三國人として公正に之を取扱ふ」旨を決定したと傳へられ、その趣旨が種々の公的機會に於て闡明されたことは、我國としては、當然の行き方としなければならぬ。而して現に我國も滿洲國もこの態度を以て彼等に臨んでゐるものと、筆者は解釋してゐる。

勿論以上の事は、無制限に避難民を收容すべしとの意味ではない。日本領土内は勿論、滿洲國にしても、國內事情やユダヤ民族の特殊性に鑑み、容易に之を爲し得ぬことは自然の數である。況や現に有史以來の大事變を遂行中であり、近き將來に時局のより重大化を覺悟してゐる我國としては、之に適當の制限を加ふる如き當然過ぎる當然事であらう。唯その制限は何人が觀ても無理のないものでな

ければならぬ。此點日本側として慎重を期すべきであらう。何となれば至極當然とする制限措置も、之を施す態度と方法の如何によつては、道義日本の眞意を疑はしむることとなり得るからである。

尙本問題に就て特に言及せねばならぬのは、上海に於ける避難民問題であらう。假令同市の特殊事情に因るものではあつたにしても、之を收容し得る成算未だ無くして斯くも多數避難民の入市を黙過したことは、現在は勿論將來にとつても一つの禍根たるは、既に指摘した如くである。現在は既に制限措置がとられ、將來著しい増加は来さないとしても、現に街上に氾濫しつゝある彼等を如何に處置するかは大問題である。苟且にも拱手傍觀し、或は措置を誤り、究極に於て何等かの不幸なる強行策を採らねばならぬ事態にまで立到る如きは最も回避せねばならぬところである。

第二節 ユダヤ問題の將來と皇道日本の使命

最後に、將來ユダヤ問題を解決する上に於ての皇道日本の使命に就て一考しなければならぬ。抑々ユダヤ問題はユダヤ人の主として生活した西洋社會に於て發生し、發展したもので、その本質・内容に就ては前篇に於て既に述べた如くであるが、結局解決至難な問題として、現在に持ち越されてゐるのである。それには、本問題の因由する所が甚だ古く且つ深く、關係する範圍の極めて複雑廣汎であると云ふ理由もある。併し根本的には、西洋人社會と云ふものが、精神的には多分に偏狹・排他的な

一面を持つ基督教文化の雰圍氣の中に育まれたものであり、他面各民族の對立・相剋と弱肉強食の個人主義的・帝國主義的傳統——所謂權力萬能の霸道思想の支配するところであると云ふ點に、大きな原因が潜んでゐると思はれる。

之に反して、八紘一字の大精神を傳統とする我が皇道に於ては、民族或は宗教を異にするの故を以て排斥又は征服の行はれたることなく、各種民族の混和一致こそその理想であつて、歐米式霸道思想と全くその趣を異にする。従つて歐米に於て厄介視されるユダヤ問題も、我國に於ては多分に解決の曙光を見出し得る筈であり、進んで東亞に於て之を實現し、世界に範を示すことは、皇道日本の責任であり使命であるとしなければならぬ。

更に又、肇國の大理想を廣く世界に實現せんとする日本であつてみれば、他面各國と協力して世界的規模に於て本問題の根本的解決に率先當る覺悟もなければならぬ。曾て第一次大戦後のヴェルサイユ會議に人類平等案を提出した日本の態度は、よく自國の斯かる使命を自覺したものの爲し得たところである。今や日本の國際的地位・聲望は昔日の比ではない。とすれば將來本問題の解決を審議する機會に際しての發言も重きを加へ、問題解決に向つて資するところ少くないであらう。

少數民族問題としてのユダヤ問題の解決に多年悩み抜いた歐米諸國が、前記大戦後の媾和會議に於て、ユダヤ人側諸代表協力の下に、本問題の緩和に關して多大の考慮を拂つたことは、未だ記憶に新たなるところである。其後獨伊の勃興とその排猶政策によつて再び世界的に激化された本問題は、今

次大戦後の事態收拾に當るべき國際會議に、改めて重要議題として登場するであらうことは必然である。既に世界ユダヤ人の指導層は之に提出すべき案の組織的研究に入つて居り、本問題の肯定的解決に日本の重要發言を期待してゐる者さへある狀況である。

我が肇國の大理想たる八紘一宇の精神が、斯かる國際的規模にまで押し擴められる時、——それは皇道日本の眞價が世界的に改めて認識される時でもあらう。

第三節 所謂「ユダヤ利用問題」に就て

ユダヤ問題の在るところ、影の形に添ふが如く之に隨伴するものに、所謂「ユダヤ利用問題」がある。別して彼等の雄大なる金融資本勢力と、その國際的連繫と、優勢なる宣傳力とを利用せよとの意見である。

概して斯かる意見を持つ者の陥り易き弊は、利用を焦るのあまり、ユダヤ人なるもの・ユダヤ問題なるものの眞面目な研究を置き忘れ、親猶主義一點張りとなり易きことである。又他面に於ては、ユダヤ人はユダヤ教を中心として國際的に一の精神王國を形成する一個の民族ではあるが、同時に故國を持たぬ彼等は、國籍・言語・其他環境の相違や所屬國家間の關係如何によつては、必ずしも單一性のものであり得ない現實の問題を閑却する傾向無しとしないのである。

だが、それは兎も角、事實に於て斯かる意見が有力に行はれ、意義的に利用策の實施された例は、史實に決して少くない。而してその結果に關しては、立場によつて種々見解の岐れるところではあるが、大體に於て、失敗に終つたものもあれば、成功したものも少くないと言ふを得よう。失敗の好適例として普通擧げられるものに、次の如きものがある。

一、一世の英傑ナポレオンは、ユダヤ人及びフリー・メイソンの有力な参加によつて起されたフランス革命に志を成した關係上、彼等の推戴を受け、彼等を利用して、その覇業に乗り出したことは、寧ろ當然の成行であつた。然るに彼が漸次ユダヤ人の本質を認識し、眞の佛國民を彼等の惡辣なる搾取より免かれしめんとして、ユダヤ人制壓の手段に出づるや、漸く彼等との間に溝渠を生じ、ワテルローの一敗後悲しむべき終りを告ぐるに至つた。

二、ドイツ大宰相ビスマルクも亦ナポレオンと同様に、最初はユダヤ人の要求を容れて之を利用してんとしたまでは、先づ何事もなかつたが、一たびユダヤ人の勢力を或程度に制限する必要を感じた時、忽ち彼等の反對を受けて、脆くも倒れたことになつてゐる。

三、獨帝カイゼル二世も第一次大戦間重大危局乗切りのためユダヤ人に對して心にも無きゼスチュアの數々をなした。紐育・ハンブルグ汽船社長ユダヤ人バーリンや辣腕家として聞えたユダヤ人ラテナウ等を重用して國政に參畫せしめ、かくて彼等の働きにより一時は敵國イギリスより物資を輸入する等の放れ業をさへ演ぜせしめた。又瑞西より封印列車を以てロシアに革命ユダヤ人を

送り込み、彼等の共産黨政府樹立を援けてブレスト・リトフスクに休戰條約を締結せしめ、西方戰場に武力戰の勝利を計畫した。併し結局に於てはユダヤ人に裏をかゝれて、國內の思想的經濟的混亂を誘發する因を作り、戰に敗れたのである。

叙上の政治家は、要するにユダヤ勢力の利用を志して、結局は自ら窮地に陥つたものである。利用に一應の成功を収めたと見られるものは、次の諸事例である。

一、歐洲先進國は新領土或は植民地の開拓に、對外發展に、多かれ少かれ、ユダヤ人を利用した事は否定出来ない。ロシアの如き現に徹底した排猶政策を採つてゐた國でさへも、曾て滿洲開拓にユダヤ人を意識的に利用したことは、既に指摘した如くである。

二、就中ユダヤ人を最も有効に利用してゐたのは、ユダヤ人自身も認めるやうに、過去に於ても現在に於ても英國であるとされる。印度の例がそれであり、對支進出にユダヤ財閥を利用し、その勢力を利用して在支權益の保全と印度の安全を策してゐるのである。

併し英國がユダヤ人を利用してゐるのは極東方面だけではない。第一次大戰當時、英佛側の敗北の豫想されてゐた一九一七年、ユダヤ言論機關や映畫會社を動かして米國の反獨輿論を煽り、パレスタイン恢復のバルフォア宣言を與へて世界ユダヤ民族の好意を獲得し、遂に米國の參戰を贏た如き著名な事實である。

ユダヤ人利用に關する過去の諸事例からして看取し得ることは、大體に於て利己主義的な一方的な

意圖に基くものは、假りに一時の成行を収め得たにしても、それは砂上の樓閣であつて持続性無く、寧ろユダヤに策動の機會を提供するに過ぎぬと云ふこと、之に反して若し利用せんとする者が被利用者たるユダヤ人に對しても同時に何等かの利益を交換的に約束し、誠實に之を履行する用意を示唆し得る場合には、比較的成功的な可能性があるといふことである。

元來二千年の長きに亘つて世界を流浪し、凡有る辛酸を嘗めて來た彼等であつてみれば、之は當然のことであつて、利用は一種の商取引としてのみ、成立し得た譯である。

然るに、日本の關する限りこの利用問題は如何に取扱はるべきであらうか。此際判然言ひ得ることは、皇道日本にはこの種商取引としての利用は有り得ないといふことである。皇道精神の向ふところは各民族の渾然たる融和であり、其處から自然に湧出する相互扶助であり協力であらねばならぬ。とすれば、日本にとつてのユダヤ人利用問題は、彼等が日本傳統の皇道精神を理解し、日本帝國の眞に信頼し得る國家であり、大和民族こそ眞に指導者として仰ぐに足る民族であることを知り、その上に於て必要に應じ彼等から示される「協力」としての形に於てのみ成立し得るものでなければならぬ。

日本帝國或は大和民族が彼等の前に何等の信頼に價せず、或は彼等を毆打し面上に唾しつゝ、他方に於て彼等の利用を云々するならば、それこそ噴飯ものとして一顧だに與へられないであらう。之を要するに、日本として協力を得る意味に於てのユダヤ人利用は最も望ましい事ではあるが、それには之を可能ならしめる素地を作るといふことが先決條件であることを忘れてはならぬ。

最後に「ユダヤ人利用問題」に關して、彼等の持つ數々の否定的な警戒すべき諸點——所謂「ユダヤ禍」を危惧する餘り、之に極力反對の立場を採る者の少くないことを指摘しなければならぬ。

別して彼等の資本力を利用することに對する反對の如き、その一例である。併し之は我國として充分にユダヤ問題の本質・内容を辨へ、警戒して當るに於ては、必ずしも憂ふべきものではあるまい。

我々は、蝮が一たび人間を咬めば、之を死に至らしめる程の猛毒を持つてゐることを知る。併し現代の文化人は科學的處理を加ふることによつて、之から貴重なる強壯劑を得ることをも辨へてゐるのである。

皇道日本が一ユダヤ民族の取扱ひに窮し、之が回避のみを以て能事足れりとするならば、何を以てか東亞の再建、民族の協和を唱道する資格やあると問ひたいのである。

著者
檢印



昭和十六年八月一日印刷
昭和十六年八月五日發行

東亞新書
東亞とユダヤ問題
定價一圓

編者 滿鐵弘報課

著者 小山猛夫

發行者 東京市麴町區丸の内二ノ二 木田開

印刷者 東京市小石川區久堅町一〇八 大橋松雄

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

發行所

東京市麴町區丸の内二ノ二
丸の内ビルディング五八八
中央論社
振替口座東京三四
電話丸の内五三五—五三八

刷印社會式株刷印同共

東亞新書發刊に際して

世界は今人類史上未曾有の動亂の中を經過しつつある。この世界史的展開の激しい環境のたゞ中にある日本の讀書界は、確乎たる道標を把握せんとして、眞摯なる探求と新しき世紀への熾烈なる知識の欲求とに燃え上つてゐるとは曰へ、世界的規模の擾亂は、動もすれば一般讀書階級をしてそれら眼前のめまぐるしき現象の繼起に心奪はれ、日本國民としての根本的關心が何れにおかれねばならぬかをも忘れしめるかの如くである。

かくて東亞新秩序の理念とその現實的基礎の探究は、たちまち片すみに押しやられる事情を呈するものである。支那事變發生以來の支那問題に對する探究の熱意は、今日恰も颶風一過の觀を呈したかに過ぎぬ。

しかも東亞問題探究の必要なること今日においてますます切實緊急なるものあるは識者の間に論議の餘地なきところである。

我々は世界的禍亂の終局する後に必ずや世界の新秩序成るべきことを確信する。然して我々東亞新秩序創建の實踐を通じて創意と自主性とを提げてこの歴史的使命遂行に參畫せんことを期してゐるのである。

我々は改めて、東亞の現實情勢の正確なる把握から第一步を踏み出さねばならない。滿洲・支那問題の再検討こそ當面最大の必要事といはざるを得ないのである。

東亞新書發刊の意義と使命とを我々はそこに感じてゐるのである。幸にして大方讀書大衆の支持と協力を得て本叢書の前進をはかりたいと衷心より希ふのである。最後に本計畫は滿鐵弘報課の助力によつて成つたものであることを記してこゝに感謝の意を表する次第である。



東亞新書第一期刊行書目

北東アジアの諸民族(新刊)山本 幡男	石炭液化諸工業の問題	阿部良之助
滿洲國境問題(新刊)増田 忠雄	東亞の炭業方策	久保 孚
東亞とユダヤ問題(新刊)小山 猛男	支那の農業	石川 正義
滿洲協和會の發達(新刊)小山 貞知	滿洲の農業經營	平野 蕃
東亞民族結合と外國勢力(既刊)尾崎 秀實	蒙古人民共和國	石田喜與司
近代支那思想(既刊)藤原 定	滿洲の美術	黒田 源次
ソヴェート計畫經濟論(既刊)奥澤篤次郎	東亞協同體の基礎分析	平 貞藏
支那工業の發達(既刊)尾崎庄太郎	東洋社會の特質	橋 樸
開拓民間問題(既刊)入江 久夫	新中央政府と修正三民主義	中西 功

東洋社會に關する外國人の論争	白井 行幸	滿洲の氣候と保健	遠藤 繁清
滿洲の風俗	永尾 龍造	西北支那に於ける灌漑	安齋 庫治
大陸に於けるインフレーション	山口辰六郎	支那に於ける民族資本	土井 章
シベリヤ開拓史	佐藤 健雄	滿洲の建築	岡 大路
滿洲農業の特質	鈴木小兵衛	聯銀券と法幣の研究	山口 正吾
滿洲に於ける商業機構の發達	齋藤 征生	北支の交通	加藤 新吉
支那事情と國際情勢	具島兼三郎	中支の水田耕作	天野元之助
支那交通概況	手島 正毅	滿洲農村共同體の研究	石井 俊之
滿洲風土	田口 稔	北支蒙の産業	村田 耕作

